

周恩来の誤算

——顧順章事件の真相（五）

松本英紀

目次

- 1 顧順章の叛変
 - 1 つくられた事件——党史から見た顧順章事件
 - 2 波紋 i——総書記の逮捕
 - 3 波紋 ii——ノウレンス事件
 - 4 波紋 iii——伍豪啓事事件（以上第五九八号）
 - 5 周恩来と顧順章
 - i 顧順章の登場
 - ii 李立三路線と顧順章
 - iii 顧順章の追放
- 2 顧順章事件の真相
 - 1 顧順章の逮捕（以上第六一九号）
 - 2 董健吾「脱險記」（以上第六二二号）
 - 3 誰が顧順章の「叛変」を知らせたのか（第六二六号、本号）
 - 4 その後の顧順章、錢壯飛——あとがきにかえて

3 誰が顧順章の「叛変」を知らせたのか（承前）

さて、ここで本題に戻って誰が顧順章の「叛変」を知らせたかに話題を転じて見よう。

党史に忠実な錢壯飛の伝記を書いた葉炳南は顧順章の逮捕後の錢壯飛の行動をどのように述べていたのであろうか。以下にやや長文になるが本題の議論の根底になるものなので重複を厭わず取り上げておこう。

一九三一年四月二十四日、顧順章は漢口で叛徒の尤崇新に確認されて逮捕されると、徐恩曾が設立した国民政府陸海空軍総司令部武漢行營（何成濬主任）偵緝処に連行された。この背骨を断ち切られた恥知らずは、その日の訊問でたちどころに叛変して敵に投降し、中共の機関、要員を売り渡した。さらに蒋介石に手柄を立てて恩賞を請う大陰謀を準備していた。これこそ顧順章が知っている中共中央の指導機関と指導者の上海における秘密地点、それに中央特科錢壯飛らの情況であり、直接蒋介石に報告しようとするものだった。

蔡孟堅が訊問したとき、顧順章の態度はひどく傲慢で、私には共産党に対する大計画があり、三日以内に中共の中央指導機関、指導者を一網打尽にできる、すみやかに総司令蔣公に拝謁できる手配をとって欲しい、直接会って陳情したいといった。このあとは多くを語らず、蔡孟堅や何

成濬とは最高機密を語るに値しないという滑稽な態度をとった。顧順章はまた南京に到着する前に、決して私が逮捕され、叛変したことを南京に知らせてはならないと念をおした。しかし、蔡孟堅と何成濬はこの階下の囚には目もくれず、遅れまいと先を争い、四月二十五日、めいめいが蒋介石、陳立夫、徐恩曾に特急密電を打ち、顧順章が逮捕され自首した、共党中央の指導機関を一網打尽にする重大計画がある、直接蔣総司令に話したい云々の反共捷報を報告した。かつ当夜、特務と一個小隊の憲兵を特別船に乗せて顧順章を南京に護送し、蔡孟堅自身も二十六日の朝、飛行機で先に南京に飛んで経緯を直接話した。

四月二十五日はちょうど土曜日だったので、錢壯飛だけが「大本營」に当直していた。武漢の特務機関から国民党中央党部秘書長陳立夫に宛てた六通の緊急極秘電報が次々に届いた。各電報には「徐恩曾親訳」の字があった。錢壯飛は受領の署名をして、一方で武漢ではどんな重要なことが起こったのかと付度した。このような緊急に続けて電報を打つ必要があるのであるだろうか。錢壯飛は警戒心を起こし、誰もいない弁公室でまえに写真に撮っていた徐恩曾の密碼本パスワード本で電報を盗み見した。びっくりしたのは、顧順章が逮捕され、すでに自首しているという内容だった。

錢壯飛は仔細に電報の内容を書き取り、元のままに電報を閉じると、まず娘婿の劉杞夫（またの名は劉正風劉驥ともい、湖南出身、当時はわずか二十歳に満たない青年で、錢壯飛に「大本營」に配属され、行政の雑務の工作に従事していたが、秘密裏に上海の李克農と連絡をとる秘密連絡に当たっていた）を夜行列車で上海に遣り、緊急情報を李克農、陳賡を通して党中央に伝えることにした。

劉杞夫が発ったあと、錢壯飛はしばらく「大本營」に留まって、引き続き様子を観察し、採るべき応変の措置を考えた。他方で、管理していた重要な文書電文や帳簿を片付け、何時でも逃げられるよう準備をした。

錢壯飛はぞくぞくと送られてくる密電から、武漢方面ではすでに特別船を出して顧順章を南京に送り、一兩日中に到着することを知らせ、すぐに民智通訊社で工作している同志と関係者にはやく引き払うよう伝言した。また天津の長城通訊社に「潮病重し、速やかに返れ」（錢潮は錢壯飛の別名―原注）の急電を打ち、胡底らにただちに引き払って隠れるよう通知した。（この話は後年、胡底と長城通訊社にいた錢壯飛の妻張振華の弟、張家龍から聞いた―原注）この時、彼の心は起伏し、思いもよらず自分があらゆる困難と危険を経てやっと開拓した特殊な戦闘の持ち場が、いきなり全てがこの極悪非道の叛徒の手で壊され、心中はなはだ辛酷であった。二日目（二十六日）の早朝、錢壯飛はいつものように平然と、この特急密電を徐恩曾に手渡した。そのあと、家に帰って休息する振りをし、悠然と「大本營」をあとにし、すぐに汽車に乗って上海に発った。

錢壯飛が奪い取ったこの特急情報、すばやく李克農と陳賡から党中央に伝えられた。当時、上海で中央の工作に責任を負っていた周恩来は、危険を前にしても恐れず、毅然として動揺せず、陳雲らの同志の協力のもとに、ただちに中央特科の工作員を指揮し、先を争って陳立夫、徐恩曾の行動の前に叛徒や特務たちと一分一秒を争い、驚き動転するような生死をかけた格闘を展開し、また緊急応変の措置をとった。四月二十六日の夜には、中共中央と江蘇省委などの指導機関はすべて引越し、安全に新しい秘密地点に移転した。不休不止、夜に日を継いだ連続の緊張した戦闘は、ついにわずか数十時間のきわめて貴重な時間を勝ち取り、党中央と江蘇省委などの機関に空前の激しい大破壊、大災難を免れさせた。

四月二十七日、顧順章の乗った軍艦が南京に到着したとき、すでに先に着いていた蔡孟堅が車を走らせて埠頭に迎えに行った。車がまっすぐに中央路三〇五号の徐恩曾の秘密指揮機関を通り過ぎたとき、顧順章はわざと煙に巻くように低い声で蔡孟堅に告げた。ここは共産党の南京責

任者の通訊社だ。すぐに徐（恩曾）先生の機要秘書錢壯飛を拘留しなさい。もし錢が逃亡していたならば、努力のすべてが無駄になる！」すべての肅清計画は、おのずと全部が駄目になる。蔡孟堅はそれを聞くと、びっくりして悲鳴をあげた。蔡孟堅はひどく腹が立って顧順章を叱責した。君は武漢であまりにも不注意で、しかも尊大だった。もしあの時、錢匪が我が中央機要部門に潜伏していた事を話していたら、私はただちに防止の措置を取り、電報で君がすでに捕らえられ、自首を願っているなどの報告をしないで、すべて私が直接中央党局に話しただろう。これは君自身の失敗だ！」一方でただちに徐恩曾に報告した。徐は自分の腹心の部下と見なしていた錢壯飛が中共中央特科の派遣してきた地下工作者であると聞くと、驚きのあまり一時口を利けないほどであった。彼は驚きと恐怖がこもこも加わったあまり、あちこちに人を遣って錢壯飛の行方を追ったが、もうどこに行つたのか分からず、すでに逃げたことを証明しようだった。続けて、徐恩曾はまた中央調査科総幹事張冲、顧建中らを派遣し、大勢の特務を率いて、その夜のうちに上海に駆けつけ、上海の英、仏租界の巡捕房（警察）と合同で、四月二十八日の朝から全市の大捜索が始まった。彼らは最速の行動で、連続して中共中央の上海にある秘密無線通信機の場所、および周恩来ら中央指導者の住所を捜査したがどこも蛻の殻で何の収穫もなかった。^①

葉炳南の顧順章逮捕後の錢壯飛の行動をあとづけた記述は諸説を整理して書かれたものであった。ということは、葉炳南がどのように各説を整合したかを考察することで、逆に党史が意図した錢壯飛の役割を明らかにすることができるはずである。じつさい葉炳南の正伝が書かれた背景には次のような事実があった。すでに詳述したところもあるがもう一度列挙しておこう。

(1) 一九三一年一月、漢口で開かれる戦勝記念会に乗じて共産党組織（中共漢口行動委員会）は蒋介石暗殺を計画したが、蔡孟堅に摘発され、暗殺組織は壊滅した。^②

(2) 蔡孟堅は武漢行営に偵緝処を設立して共産党対策の本部とした。元中共黨員宋恵和の助言で自首奨励政策を採用し、彼らを利用して中共黨員を逮捕した。三一年二月、蒋介石暗殺未遂事件で逮捕された尤崇新らは蔡孟堅に帰順するが、党組織から工作資金を受けてふたたび蔡孟堅の暗殺を謀る。彼らは蔡殺害の機を失うが、蔡の秘書宋恵和は襲撃を受けて瀕死の重傷を負わされた。^③

(3) 尤崇新ら七人の自首犯人は逃亡寸前で逮捕され、行営軍法処に送られて死刑の判決を受け、四月三十日に執行されることになった。死刑執行前、尤崇新は獄中で血書を書いて、偵緝員に随つて街に出て共産の逮捕に手柄を立てて一死を免れたいと申しでた。宋恵和の懇願でふたたび命を救われた尤崇新は街上で顧順章を発見し、顧順章逮捕の手柄を立てた。^④

(4) 一九三〇年十一月、中共武漢市委書記になった尤無魂は、三一年一月に逮捕されて叛変し、名を尤崇新と改め、楊慶山が処長、蔡孟堅が副処長であった武漢警備司令部稽查处の秘密調査員になった。中共漢口行動委員会会員の宋恵和は一九三〇年九月十六日に国民党憲兵三団に密かに逮捕され、叛変後、周大烈に名を改めて秘密調査員になった。憲兵三団が南京に移動したあと、周大烈を武漢警備司令部稽查处に引き渡して、稽查处になった。三月、蔡孟堅が武漢行営偵緝処処長になると、周大烈、尤崇新らも偵緝処の特務となった。その後、偵緝処は尤崇新、胡士林が叛共後にまた反逆し、共産組織を恢復する活動をしているのを非難し、尤、胡を行営偵緝処に押送して銃殺に処すことにした。周大烈は尤崇新の救命を蔡孟堅に懇願し、胡士林一人だけを銃殺すれば、他の者を戒め

るに十分であろうと説き、尤崇新に功績を立てて罪を償い、反共に積極的になるよう勧告した。^⑤

(5) 漢口に遣ってきた顧順章をずっと監視していた蔡孟堅は、新世界飯店に毎日のように共産黨員らしき者や高級国民黨員が出入りしているのに不審に思い、外出の機会に写真にとつて南京の調査科の大本営に送り、監視している黎明が顧順章であるかどうかを照会した。徐恩曾は蔡孟堅に逮捕し、商招局の汽船で連行するよう命じた。そこで蔡孟堅は偵緝処の秘密偵緝員を総動員して顧順章の捕獲に全力を挙げた。顧順章は四月二十四日の金曜日に逮捕された。彼はすぐに特別調査局局長何成濬に逮捕された情報を南京に伝えてはならないと念をおし、情報が途中で遮られないようにした。何成濬は蒋介石に手柄をたてるために先を争って顧順章が逮捕された情報を南京に電報で伝えた。顧はそれを知ると地団駄を踏んでくやしがあった。蒋介石の機要秘書の一人は共産党だ。顧順章はその名字を知らなかったが、もしその人物がその電報を奪い取つたなら、きつと事前に中共の指導者に逮捕された情報を知らせるに違いない。その夜の六時、電報は南京の特別調査局に到着したが、徐恩曾はすでに弁公室を離れてダンスパーティーに出かけていたので、この電報は機要秘書の錢壯飛の元に送られた。彼はすぐに顧順章が捕らえられたことは何を意味するか考えた。その夜、錢壯飛は娘婿の劉杞夫を急行列車で上海に遣つて李克農に知らせ、李はさらに陳賡、周恩来に伝えた。上海の共産党はただちに上海の秘密場所を閉鎖して潜伏した。^⑥

(6) 三二年三、四月の間、蔡孟堅は元中共黨員黃佑南の手引きで中共湖北省委を破壊し、また漢口仏租界で租界警察と合同中で中共長江局の尤崇新を逮捕した。蔡孟堅は尤崇新に扮装させ、特務数名を繰り出して漢口の各大馬路を往来して中共黨員を捜索した。四月のある日、尤らは江漢関からさほど遠くない輪渡埠頭付近で中共中央保衛小組の責任者顧順章

を発見し、大声で追尾の特務に知らせて逮捕した。^⑦

(7) 後年、孫曙は顧順章の後妻を訪ねて顧順章が逮捕された新しい情報を得た。それによると、一九三一年四月二十四日、金曜日の午後、六名の緝務員はそれぞれ尤崇新、周大烈の後に随つて漢口江漢関一行き来して革命黨員を識別して逮捕することになっていた。午後五時ごろ、緝務員らは尤、周を連れて偵緝処に帰る準備をしていると、当路の三教街西側の二碼頭から三陽路口北冷落角の阜昌街付近で映画を観おえて歩いていた顧順章と中央軍委駐漢口交通科主任の張松生を発見して逮捕した。この後、緝務員は顧が泊まっている世界大旅社の部屋を捜索し、数件の文書を押収した。さらに二階の一室で張増謙を逮捕した。偵緝処で偵緝員が顧に刑具を使おうとしたとき、周大烈が知らせを聞いて飛んで来て制止し、顧を処長弁公室に案内して、一刻も早く転変することを希望すると勧告したが、顧順章は、私の転変工作はすべて上海にある、私自身が上海に駆けつけて行なわなければならない。君たちは私が捕らえられたことを南京に告げてはならないと応えた。二十五日の夜、蔡孟堅は南京の中央調査科科长徐恩曾に六通の徐恩曾親訳の密電を打った。四月二十七日、三名の緝務員が顧順章を江新輪に乗せて南京に護送した。一九三三年八月、周大烈は実弟の宋曙和、叔父の宋玉成を顧順章が開いた特務訓練班に送つて習得させた。^⑧

(8) 現代作家の王光遠は、二十四日の午後、新市場の舞台を終えた顧順章は張崧生と接触したあと、三教街西側の三岔路口を北に曲がつたところで尤崇新に発見されたと述べる。^⑨

(9) 顧順章逮捕の鍵を握る人物の蔡孟堅は、命を助けた尤崇新が街を歩き来して眼線ていさうしていたある日の午後、尤崇新はかつて暴動に参加した総指揮者の顧順章を指さし、随行の行動員を手招いてすばやく逮捕したという。顧は漢口の陶陶大旅館とまに住りたいと要求したので、彼の部屋まで

連れて行くと一人の交際女郎しごうかのうはながたが留まっていた。彼女は顧順章の魔術団の助手で、顧はそのとき何の気も留めなかった。軍法処に押送されて訊問を求められると、蔡孟堅に会わせてほしいと叫んだ^⑩。

(10) 顧順章を密告した叛徒は王竹樵なのか、あるいは尤崇新なのかに關して見解は一つではない。一九七九年五六月の間、もと中央特科で工作していた李強、劉鼎、陳養山、柯麟が中央特科の情況について懇談したとき、王竹樵であるとした。一九八一年十月、李強はある会議でこう語った。当時、我われは上海で顧順章が王竹樵に発見されたことを知った。これは上海の我われに知らされたものである。ある人が書いたものは叛徒の尤崇新であり、他の情況と同じであった。顧順章の妻の弟（張長根）も材料を書き、彼の根拠は顧順章が捕らえられたあと、彼も南京に行つたことによる。彼が書いたものも王竹樵であり、私と同じであった。世界飯店と言うのも、何の舞台に立ったのかもまったく同じである。私はおそらく一人であろうと言うのは、彼は名字を変えていたので、顧順章は知らなかったであろう。おそらく二人とも存在した、おそらく王竹樵もいた、尤崇新も存在した。顧順章はただ王竹樵だけ知っていて、他の人は知らなかったのだ、だから彼は張長根とおなじことを話したのである。穆欣は過去の關係ある著作の記述を沿用し、密告者は王竹樵だと書いた^⑪。

(11) 行營処の將校クラス全員が訊問に加わった。黄凱らは顧順章に神経尋問を行ない、各種の方法を用いたが効果はなかった。尤崇新はあれこれの口舌で自供を勧告したが、顧は、お前らゴロツキは罪のない者に濡れ衣を着せようとする遣り手だと罵った。夜半になって、自首人の黄堅と勤務兵が黄凱のもとに飛んできて、彼が白状した、老蔣（蔣介石）に会ってから自首するといっていると告げた。黄凱と蔡孟堅はすぐに密電で徐恩曾に報告した。翌日の払曉あけがた、何成濬は顧順章と接見し、応対は特

別丁寧であったが、顧順章はなお自ら老蔣に会ってから自首したいと言いつ張った。南京から返電が来て、老蔣は何時でも会えるとあった。顧順章はもう何も言わなかった。我われは本来第五航空隊の飛行機で護送するつもりであったが、座席が少なかったので軍艦楚豫に替えた。何成濬は憲兵一個小隊を派遣し、我らの十数名の特工を加えて蔡孟堅が護送した^⑫。

(12) 四月二十五日、武漢から南京に送られた六通の至急電報が夕方ごろ南京方面に着いた。ただ、この日は土曜日で、南京はもうすっかり週末を楽しく過ごす気分浸っていた。この時、徐恩曾はとくに弁公室を出て情婦のところへ行っていたので、このことに何一つ知ることはなかった。特務大本營の留守番をしていたのは、いつもの通り腹心の秘書錢壯飛であった。耳をつんざくようなモーターバイクの音が聞こえ、電信係員が続けて届けてきた六通の至急電報を見ると、錢壯飛はふと懷疑が生じた。どんな事があるか、こんなに緊迫し、また秘密を保持するのだろうか？ 電報にはみな蔣介石、陳立夫、徐恩曾親収折（本人自らが受け取って、速やかに開封する）の字句があった。一つの不吉な予感がただちに脳裏に浮かんだ。武漢方面ではきつと非常事態が発生し、わが党にとつて極めて不利なことも知れない。彼はただちに判断を下し、弁公室のドアをしっかりと閉めて密室に入り、真つ先に注意深く徐恩曾宛の密電を開封し、とつくに入手していた徐氏の秘密の極秘密碼本コードブックの副本を取り出して破訳した。訳文が目の前に現れたとき、ひどく驚いた。第一報は、何成濬が徐恩曾に出し、国民党中常委秘書長陳立夫に渡すもので、黎明が捕らえられた、すでに自首した、迅速に南京に護送することができれば、三日以内に中共中央機關をすべて肅清できると述べていた。第二報は、軍艦で黎明を南京に護送するというものであった。第三報は、改めて飛行機で南京に護送するというもので、またこの情報を徐恩曾の側近

の者に知らせてはならないとあった。その他の三通は蔡孟堅が出したもので、内容は同じであった。……銭壯飛は一行一行目に触れるものはみな心を驚かせる電文を見て、中共三人特別小組の直屬上司の黎明がすでに叛変し、党中央の上海のすべての機関を脅かす危険な状況がほどなく発生するのを知った。この時、ただ銭壯飛一人だけがこの陰謀を知っていた。徐恩曾の秘密にして見せなかった暗号がどうして手に入れることができたのか？元をただせば、これは銭と李克農の知恵の結晶であった。徐氏は銭壯飛に対する信任は疑いないが、ただこの密碼本は護身符のように秘密にして人に見せないものであった。蒋介石と陳立夫が特別に指示していたので、この密碼本は党国の少数の高級官員の使用に限られており、しかも常時身に着けることを義務付けられていた。しかし徐恩曾には致命的な弱点——好色があった。徐恩曾はあるとき、上海に行つて会議を招集し、会議後いそいそと美人女性に会いに出かけた。李克農と銭壯飛はチャンス到来と思ひ、わざと顔をこわばらせていった。貴方が身に着けているその本はそのままでは具合が悪いのではないですか。李克農のこのような警戒心を見て、徐恩曾は満足の表情をした。彼は密碼本を取り出し、李克農の処で特別金庫を探して中に入れ、彼しか知らない記号をつけると飄然と出かけていった。李克農と銭壯飛はこの千載一遇の好機を利用して、こっそりと金庫を開けて密碼本を取り出し、當時もつとも性能の高いドイツ製のカメラで一頁一頁撮影した。国民党当局の最高中心の機密はこうしてかれらの手に入った。すべての電報を破訳したあと、厳しい形勢は銭壯飛に迅速な行動を取らせた。彼はすぐに「京滬路列車時刻表」をめくって、夜行の上海行きの特急列車があるのを見つければ、娘婿劉杞夫を呼び寄せ、厳しい顔つきで大至急の事情だ、家に帰らずすぐに上海にいつて、李克農に黎明が叛変した、大破壊がはじまると中央に伝えるよう頼みなさいと告げた。劉杞夫が去ると、この中共

情報戦線の英傑はすばやく帳簿を片付け、さらに丹鳳街の民智通訊社に行つて配置していた同志を退避させた。¹³

(13) 顧順章は護送の任務を成し遂げたあと武漢に帰つてきて、大手をふつて漢口大智門の大智旅館に泊まり、中共秘密工作の規律を顧みず、ふたたび化広奇の芸名で漢口新市場の遊戯場の舞台上に上がつて魔術を公演して金を稼ぎ、また脂粉の中で醇酒美人に陥り、楽しみに耽つて上海に帰ることを忘れた。不運にも四月二十四日の晩、漢口特三区のゴルフ場前で、中共の転変者の王竹樵(尤崇新)に確認され、顧順章と陳連生は同時に逮捕された。王竹樵は当時中央調査科南湖調査員兼陸海空軍總司令武漢行營(主任は何成濬)偵緝処少將処長蔡孟堅の工作員であった。顧は逮捕されたあと、行營偵緝処に連行され、すぐに転変して政府に手土産を差し出した。中共駐武漢秘密交通機関、中共紅二軍団駐漢口弁事処、中共特四科に直屬する指導、英商祥泰木材公司の拖船の陳姓という舵手を指摘し、さらに自らが南京軍事最高当局に中共中央の指導機関と指導者の上海での秘密所在地及び中共特科銭壯飛らの情報を自供した。顧は蔡孟堅に自ら總司令の蔣公に会うのでなければ、もう中共に係わる如何なる情報も提供したくないと表明し、また特に再度蔡孟堅にこういった。彼自身が南京に到着する前に、決して捕らえられた事を南京に電報で通告してはならない。武漢当局は顧順章の勧告を無視し、四月二十五日に蔣總司令、陳立夫部長、徐恩曾主任に特急密電を連ねて、顧がすでに逮捕され自首したと報告した。電報が南京陸海空總司令部に届いたとき、時に弁公庁で工作していた李克農がこの電報を翻訳し、一時間ほど留めてから閲覽に供した。またその一時間内に先を争つて上海の中共中央に知らせた。当時の總司令部弁公庁は決してこの中共の無名の小卒を逮捕したことが何か重大な価値があるとは思わず、必ずしも大げさに驚くようなことはしなかった。顧順章はもう電報が出されたのを知ると、頭を

振ってもう終わった、周恩来を捕まえ損ねたため息をついた。一九三一年四月二十五日はちょうど土曜日で、おりよく銭壮飛は正元実業社で宿直に当たっていた。門を閉めて読書をしていると、夜の十時ごろ、思いもよらず武漢から出された六通の陳立夫、徐恩曾宛の特急絶密親訳電報に接し、異変があったのは分かったが、武漢でどのような重要な事情があったのかは分からなかった。銭はそこで盗撮した密碼本で電文をすばやく訳出してひどく驚いた。電報はいずれも武漢行営主任何成濬が打つたもので、第一報の急電は、「黎明が逮捕された、またすでに自首した、迅速に南京に押送できるなら、三日の内に中共中央機関をすべて肅清できる」とあり、第二報は「明日の朝、軍艦で顧順章を南京に護送する」とあった。第三報には「顧順章の供述では軍艦は遅い、速やかに飛行機を寄こして迎えに来て欲しい」という内容であった。銭は、これは軍事緊急事件ではなく、顧順章の名は経伝には見えず、また中共要人ではない、ただちに飛行機を派遣して迎えにくることはないだろうと思った。

銭壮飛は仔細に電報の内容を書き止め、ふたたび電報をもとどおりに閉じたあと、ただちに中央調査科で雑役をしていた娘婿の劉杞夫に、当夜十一時の夜行特急で上海に行き、早朝六時五十三分に駅に着いたら、この特急情報を李克農おしごん舅おじさんに直接手渡し、陳賡に托して上の中共中央に報告してもらおうよう命じた。四月二十七日（月曜日）の朝、銭壮飛はいつものように自ら自動車運転して下関に出向いて、徐恩曾が乗る朝七時二十分の上海から南京に着く汽車を出迎え、再度、徐を正元実業社に送って出勤した。弁公処に着くと、銭壮飛は武漢から急電が来ていると告げると、徐は直接彼自身の密碼本コードブックでその親訳電報を面前で訳すよう言いつけ、銭は一通を訳すことに差し出した。訳し終えると、銭はこう言った。来電に、我われのここに共産党がいると言っている！徐恩曾は信じず、濡れ衣を着せる人がいると思った。そのあと銭壮飛は何事もなかったよ

うに家に帰って休息する振りをして、悠々と落ち着き払って立ち去り、まっすぐ駅に行き、汽車に乗って上海へ向かった。^④

上に列挙した顧順章逮捕前後の(1)～(13)の「前史」は作者らがそれぞれ係わった場面の回想を述べたものであった。そこには作者の功名心や政治的な保身の思惑が表れている。また現代の党史作家は党の見解にもとづいて各自がそれぞれの推量をはたらかせた。したがって各論評には異なる表現が見られ、矛盾する内容があったが、これらは事実を脚色したものであるという意味においてはすべて真実であり、相互の叙述は密接に関連しているであろう。

では、党史作家が強調する銭壮飛の功績はどのように創作されたのであろうか。冒頭に訳しておいた葉炳南の伝記をもとに、「前史」に述べている内容を吟味して見よう。葉炳南は銭壮飛の伝記を書いたとき、党史が描いた顧順章事件の筋書きを根底にして、その上に銭壮飛の役割を当てはめようとした。だから、葉炳南の伝記には平然と党を裏切つて組織の壊滅を謀る顧順章に対して懸命に党の危機を救おうとする銭壮飛を描写することが前提になっている。だがこれだけでは党史研究の参考になるが、顧順章事件の真相を知るには事足りない。「前史」の中には顧順章が「叛変」するに至った動機がそれぞれ興味深く語られている。

上記に引用した葉炳南の文章では、顧順章が叛徒の尤崇新に発見されて逮捕されたところから話を始めているが、この尤崇新なる人物は単に顧順章を発見したというだけではなく、顧順章の「叛変」に重要な役割を担っていた。尤崇新が前述のように二度も九死に一生を得て、ついに武漢偵緝処蔡孟堅の部下になるのだが、その転変は簡単な経緯ではなかった。「前史」(1)、(2)、(3)、(4)にもあったように、蔡孟堅は武漢中共組織の蒋介石暗殺計画を摘発したあと、宋恵和を親信の身辺秘書に引き立て、彼から共産党対策の技術ノウハウを聞き、じっさい共産党員に自

首政策が積極的に進められ、彼らによって大きな成果を得た。尤崇新はこの政策で一命を取り留めた一人だった。尤崇新は原名を游中興といい、仮名は尤無魂といった。もと武漢時代の中央軍委特科の一員で、李強の部下であった。その後、上海滬西（東）区委書記となり、三十年末に武漢市委書記になる。三十一年一月、蒋介石暗殺未遂事件に係わって逮捕されるが、自首して転向する。しかし、尤崇新らの首謀者は党から活動費を受けて蔡孟堅殺害を謀るが宋恵和に重傷を負わせるだけだった。上海に逃亡寸前、再度逮捕され、軍法処に送られて処刑の判決を受ける。執行間際になって、尤崇新は血書を書いて手柄を立てて罪を償いたいと哀願し、宋恵和の助命嘆願によってふたたび共産党員の探索に従事することになった¹⁵。

地方の有能な共党の幹部の単なる転向過程として読めば取り立てて不可解なことはないが、蒋介石暗殺が中央特科の顧順章肅清実行グループによって計画され、それを顧順章が薄薄感づいて国民党の蒋介石、陳立夫、徐恩曾に転向の意思を暗に表明していたということなれば、宋恵和、尤崇新らの行動には深い策謀が隠されていたことになる。そう考えなければ、次のような行動はどのように理解したらよいのだろうか。

最初の疑問は、武漢の行動委員会による蒋介石暗殺計画が周到に準備されたにも係わらず、何故あのように裏切り者が出たのかということである。そもそも暗殺計画そのものがなかったのではないか。だから本来ならば嚴重な叱責を受けるはずの蔡孟堅は、却って蒋介石から賞賛され、多額の褒章金さえ与えられた。蔡孟堅はその金を暗殺犯らに分配して反共活動に使うのである。蔡孟堅が最初に信頼した宋恵和の行動も不可解であった。中共漢口行動委員会のメンバーであった宋恵和は、三十年九月に国民党憲兵隊に逮捕されるが蔡孟堅に救出された。その蔡孟堅の殺害を謀った尤崇新らに菜刀で頭頸を斬りつけられ、命を落とすところで

あったが、じつに奇妙なことに処刑の判決を受けた尤崇新の助命を必死に請うのであった。これらの経緯の話は、蔡孟堅自身の回想によっている。蔡孟堅の話の結論は自分が考案した自首政策の成果が顧順章の逮捕にあったということであろう。したがって宋恵和と尤崇新のほんとうの正体を知らなかったに違いない。じつは二人とも巧妙に蔡孟堅の懐にもぐり込んだ工作員で、つぎつぎと自首をくり返したのはその身分を隠蔽するためであった。もつとも宋恵和は顧順章の指示のもとに動いていた部下で、中央特科の暗殺実行グループと直接の連絡を取っていた尤崇新とは一定の距離を置いていたのではないかと思われる。しかし、尤崇新の役割を十分認識していたので、処刑の判決を受けた尤崇新の助命を懇請したのであった。宋恵和は後年、三十二年八月、顧順章が中統内に設立した特務訓練班に実弟の宋曙和と叔父の宋玉成を送って情報技術を習得させ、顧との関係の親密さをうかがわせた。一方の尤崇新がかつて武漢で李強の部下であったことを想起すれば、上海の顧順章肅清実行グループの直接指示のもとに動いていたことは明白となる。尤崇新が武漢行営偵緝処の蔡孟堅に密着し、顧順章に係わる蔡孟堅の動静を上海に報告していたことは、徐恩曾のもとに潜入していた銭壯飛よりはるかに重要な役割を担っていたことになる。

李強は後年の座談会で顧順章を発見したのは王竹樵だったと断言し、また尤崇新もいたとも語った。尤崇新は国民党内では尤崇新の名前を使い、共産党では王竹樵の名前を使い分けたに違いない。「前史」(10)さらに李強が思わず口を滑らしてしまった、顧順章が逮捕された情報は我われ上海が最初に受け取ったという発言は、党史が苦心して作り上げた銭壯飛神話のストーリーをいとも簡単に反故にしてしまった。李強は上海の顧順章肅清実行グループの存在を誇示する意図で口にしたただだが、これが王竹樵（尤崇新）からの報告であったことは自明のこととして

黙認したのだった。じつさい李強はただちに中央軍委参謀長で暗殺実行グループのリーダー聶榮臻に伝えられ、聶は周恩来の家に飛んで行き、顧順章の叛変を伝えたが、あいにく周恩来は外出中だったので、鄧穎超にはやく引越しするよう伝言した。後年に書いた聶榮臻の回想録は混乱があつて党史にあわせた記述になつてゐるが、鄧穎超に話した伝言の内容から見れば、これが顧順章逮捕の最初の情報であつたことは疑いない。^⑥

顧順章の叛変が筋書きとおりであつたならば、逮捕されたあとの顧順章の動向も党史の所説とは異なつてくる。ウエイクマンは徐恩曾の記録を引いて、顧順章が早くから南京当局と話し合いが出来ていて自首の機会を計つていたとした。南京から搜索を依頼された蔡孟堅は行営偵緝処の偵緝員を総動員して顧順章の発見に尽力した。だがじつは、蔡孟堅は顧順章の漢口での行動を逐一把握していて面識のあつた尤崇新に追跡させ、漢口特三区のゴルフ場で接触させたのであつた。顧順章が発見された場所については諸説があるが、逮捕された場所は一箇所であるはずなのにいくつもあるのは不可解である。動員された緝務員たちは顧順章の行動の背後にすでに筋書きがあるのを知らず、めいめいが手柄を誇示したのかも知れない。あるいは顧順章は自らこっそり出頭したので誰もその経緯を知らなかつたとも考えられる。

顧順章が強制的に逮捕されたのではなく、自ら進んで自首した事情はいくつかの場面に見える。顧順章は行営偵緝処に連行されると、そのまま拘束されて留まることなく、これまで泊まっていた陶陶旅館に戻りたといと告げる。調査科の特派員であつた黄凱は将校クラスの全員が訊問に当たつたと述べるが、当初、彼らは誰も顧順章が何者か知らなかつた。顧順章はただ蔡孟堅に会わせるよう求めるだけで何も口外しなかつた。彼らが刑具を用いて自供させようとしたとき、知らせを聞いた周大烈（宋恵和）が飛んで来て制止し、顧順章を客間に案内して鄭重に應對した。周

大烈は先にも述べたように蔡孟堅の身辺秘書で、この時、顧順章の真意をもつともよく理解していた人物だつた。周大烈の仲介で蔡孟堅に会うことができた顧順章は国民党への転向をはっきりと意思表示し、蒋介石に面会できることを条件に、「前史」(12)にあるように多くの情報を提供した。著者の周谷によれば、この時もう銭壯飛らの情報も提供したというから、顧順章が執拗に口止めしたという逮捕されたことを南京に知らせてはならないことと話が食いちがう。黄凱の回想では、蔡孟堅の訊問に同席し、二人で南京に報告したという。^⑦

通説では、顧順章は四月二十四日の午後、尤崇新に発見されて逮捕され、そのまま偵緝処に連行されたことになつてゐるが、直接に逮捕に係わつた尤崇新、周大烈の証言が残つていないので確かな期日はじつところ分からぬ。一方の当事者の蔡孟堅はその回想録で、某日(民二十年四月二十日左右―原注、以下同じ)、尤某は漢口特三区(以前の英租界)のゴルフ場前で顧順章(逮捕された時、年三十一歳)が他の共党と街頭で接触しているのを発見し、暴動の指揮者だと指認され、否認するすべなく、従容と逮捕されたと述べていた。^⑧顧順章が何時、逮捕されたかは、顧順章事件の真相とは別に事件全体の構成の上で重要な意味をもつていた。もしも顧順章の逮捕が二十四日の金曜日でなければ、顧順章事件の党史は成立しなかつたし、銭壯飛の神話は生まれなかつた。

銭壯飛が党の危機を救つた英雄と持ち上げられるのは、上司の徐恩曾の留守中、武漢からの密電を盗み読み、顧順章の党の壊滅計画をいち早く党中央に知らせた功績によるものだった。しかし、この功績はまったくの偶然によつて得たものである。しかもいくつもの偶然が重なつていた。だが、ある事件が一つの偶然によつて成り立つことはあつても、いくつもの偶然が重なつて成り立つことは現実には皆無である。そうすると銭壯飛の英雄神話はいくつもの架空の事実を積み重ねて作り上げた

創作ということになる。

錢壯飛がなければ我われはいま存在しなかった、という周恩来の「英雄神話」は、最初に英雄という結論が作られた。原時点から錢壯飛はすべてに英雄的行動があったわけではない。後世の党史作家が周恩来の英雄神話の話に合わせるためにいろんな憶測をあたかも真実のように語ったのである。

蔡孟堅は顧順章の要求でその日のうちに面会した。顧順章は会うなり、蔡孟堅が武漢の共産党対策の責任者であることを知っていると述べ、共産党対策に大計画があるので、速やかに蔣総司令に謁見できるように手配して欲しい、その場で直接衷情を申し上げると冷静な態度で応答し、これ以上は口を噤んで話さなかった。蔡孟堅は顧順章を特定すると、行営処主任何成濬に引き合わせたいと告げるが顧順章は拒否した。何成濬も顧に会いたくないといい、直接蔡孟堅と何成濬が別々に中央に共党首要顧順章が逮捕され自首し、蔣公に謁見を求めていることなどを電報で伝えることにした。

蔡孟堅が顧順章を訊問した状況についてはいろんな表現があった。中統の幹部で長年特務工作に従事していた張文はこう語る。蔡孟堅は顧順章をまるめ込んで叛変を誘う方法をとり、自ら煙草や茶を勧めて接待した。はじめ顧はひと言もしゃべらなかつた。のちになつて蔡は、我われは会つたことはないが、私はあなたを知っている、あなたもきつと私を知っているはずだ、いっさい多くを言うことはない。もし生きたければ、知っていることをすべていいなさい、そうでなければ、ただ死あるのみだ。最後に蔡孟堅は、私はあなたを南京に送ることにした、あなた自身よく考えて、自身の前途を選択しなさいといった。現代の研究者、周谷も前述（前史13）のように、顧順章は逮捕されて行営偵緝処に押送されると、すぐに転向し国民党政府に中共の秘密情報の手土産を提供し、先

ず身の安全をはかる。その上で顧順章は蔡孟堅に自ら蔣介石総司令に自ら会うのでなければ中共に関する如何なる情報も提供したくないと言明し、また、南京に到着しない前に決して逮捕されたことを南京に電報で知らせてはならないと念をおした。武漢当局は顧順章の勧告を無視して、四月二十五日に蔣介石総司令、陳立夫部長、徐恩曾主任に続けて特急密電を打ち、顧が逮捕され自首したことを報告したという。

ここでもう一度、葉炳南の錢壯飛の伝記を取り上げて見よう。葉炳南の伝記は本論の冒頭に見えるように、蔡孟堅、張文、穆欣、周谷らの当事者や現代作家の記録を用いて書いた党の公式の伝記であった。葉炳南はこの伝記で錢壯飛評価を権威づけた。錢壯飛評価の核心はもちろん本論が説く錢壯飛神話である。そのため作者は顧順章を徹底して悪逆非道の人物に描いた。そのような顧順章を強調すればするほど錢壯飛の英雄神話の信憑性はますます高まるのだが、しかし、つぎのような顧順章に対する描写は現実とはほど遠い、巧妙に文飾された党史を意図的に誇張するものに他ならなかつた。

「顧順章が逮捕された後、漢口の特務機関——国民党陸海空軍総司令武漢行営（主任は何成濬）の偵緝処に押送された。この背骨を断ち切られた薄汚い奴（原文は、断脊梁骨的癩皮狗、脊梁骨は背骨、背柱、抛りどころの意。癩皮狗はかさぶたのできたイヌ、転じて下品で恥知らず、厚かましい、薄汚いの意。癩皮狗の語は、「前史」（12）の康学軍の文章に、顧は逮捕されると、すぐに脊骨を断ち切られた癩皮狗になった」というように用いている。中共の保護を失った裏切り者という意味にもとれる）は、その日の訊問でたちどころに叛変して敵に投じ、当地の中共機関を自供した。この恥知らずの叛徒が国民党に身売りするほんのちよつとした手土産に過ぎなかつた。彼はお蔣介石に手柄を立てて恩賞を願う準備をしていた」

「これこそ顧順章が知っている中共中央指導機関と指導者の上海の秘

密場所、及び中央特科の錢壯飛らの状況を直接蒋介石に報告することであった」

「彼は陳立夫、徐恩曾が武漢に派遣した両湖調査員、武漢行營偵緝処の特務ボス蔡孟堅に会いたいと申し出、また、蔡孟堅が武漢の共産党対策の責任者であることを知っているといった」

「蔡孟堅が訊問した時に、顧順章はなにはばかることなく、態度はひどく傲慢であった。彼は共産党に対処する大計画があり、三日のうちに上海の中共中央指導機関と中央指導者を一網打尽にできる、速やかに総司令蒋介石に謁見できるように手配して欲しい、直接陳情するといった」

「そのあとはもう多くを語らず、蔡孟堅、何成濬らとは最高機密を語るに値しないと軽蔑した。また蔡孟堅に、南京に到達する前に逮捕され叛変したことを南京に電報で知らせてはならないといった」

「蔡孟堅と何成濬はこの階下の囚を眼中におかず、功を争うに急で、四月二十五日に先を争ってめいめいが蒋介石、陳立夫、徐恩曾に特急密電を打った^②」

葉炳南は顧順章を「背骨を断ち切られた薄汚い奴」と口汚くののしつた。どのような意味の表現なのかよく分からないが、もつと深い意味があるのかも知れない。ただ、このような悪評にも顧順章の行動の中に真意が垣間見える。葉炳南は故意に知らない振りをしているに違いないが、国民党に転じた後にきつと高い評価を得られるはずだという顧順章の自信が見て取れる。

さて前述の「前史」の各論評は、多くの作家の叙述であったとはいえず、一つの事件を書いたものであるから同じ内容であるのはとうぜんといえるが、どの文章にも同じ観点があった。例えば、顧順章は偵緝処に連行されると、傲慢な態度で蔡孟堅に接し、中共組織を肅清する大計画があるので南京の要人に会えるよう求める。また、南京に到着する前に、逮

捕され自首したことを電報で知らせてはならないと警告をしたという。これらの顧順章の要求は二つの側面から解釈ができればよい。その解釈には二つの前提があった。

一つは、顧順章「叛変」の動機からの解釈である。蔡孟堅に面会してからの顧順章の言動には作家たちに共通の認識があったが、逮捕前後の状況に対しては諸説紛々の見解が見られた。その根本的な違いは作家たちの顧順章の転向の動機に対する見方にあった。顧順章は共産党、国民党の双方から叛徒、叛逆者のレッテルを貼られて銃殺という無念の最期をとげる。だが一部の当事者を除いて、顧順章がなぜ叛徒と呼ばれ叛逆者とされたのかの背景までは知らなかった。だから顧順章はいろんな場所で発見され、いろんな形で逮捕されることになったのである。しかし、逮捕されたすぐ後に、南京の要人に会って直接話したいといったのは、顧順章にとっては、すでに転向の意志が南京当局に伝えられているはずで、一日もはやく彼らと直接政治議論を交わしたいという思いがあったからである。このような顧順章の意志は現地の当事者、蔡孟堅や何成濬に通じていたはずであるが、彼らは有頂天になって事の重要性を深く認識していなかった。

もう一つは、錢壯飛の英雄神話に帰結する偶然の事実を積み重ねて、顧順章の叛変の物語が作られたことである。このような論理では、顧順章が逮捕されたのは偶然で、張国濤の護衛任務を終えて漢口に帰って来ると、党の規律を守らず、公然と娯楽場で特科の部下と舞台にあがって魔術を公演した。酒色に溺れた顧順章は漢口行營偵緝処の搜索の網の目に掛かり、あえなく逮捕されたとし、偵緝処に連行されるとたちまち自供して、漢口の党と軍組織を暴露したが、それ以上の情報は南京に赴いて直接指導者に伝えたいと話したという。

葉炳南はこれらの行動を顧順章の資質にもとづくもので、それぞれの

行動には何の必然性も関連性もなかったとした。党の規律を破ったのも、手持ちの資金に欠乏したので得意の魔術の公演で遊興費を稼いだだけで、その結果、偵緝処の捜索に簡単に発見されたのだという。だが、顧順章は何の目的もなく漢口に留まっていたのであろうか。顧順章は蒋介石暗殺計画のときから国民党への転向を決意していた。だから漢口に帰ってからその機会を窺っていた。公然と舞台上に立ったのは漢口での行動をはやく気づかせようとしたとも考えられる。その間、顧順章がいろんな人物と接触していたことを蔡孟堅に探知され、南京当局に照会していたことはすでに徐恩曾の記録に見たとおりである。逮捕された後、顧順章が蔡孟堅に傲慢な態度で接したことも、前述に推測したように、顧順章の行動は彼らに通じていたので高飛車に実行を迫っただけのことであった。

武漢行営当局は顧順章の要求で南京に電報を打った。この電報問題は錢壯飛神話が作られる重要な要素となる。ところで、これまでの顧順章事件の物語は、この電報問題あたりから顧順章から錢壯飛に主人公が入れ替わって語られる。結論的にいえば、顧順章が主人公の物語は時間的な推移によって語られ、錢壯飛の物語は、錢を評価する神話が作られ、この錢壯飛神話から物語が展開される。したがってこの問題に対する中共党史の論評は巧妙な論理で錢壯飛が功績を得た筋書きが語られる。党史は葉炳南の錢壯飛伝に見るように、次のような前提があった。

(i)、錢壯飛が武漢からの電報を盗み見した(盗み見の原文は截獲である、途中で遮って奪う、待ち受けて捕獲するなどの意)のは四月二十五日、土曜日で夜であった。(ii)、土曜日は、この建物のあるじの徐恩曾はいつものように週末を情婦と過すため上海に出かけていた。(iii)、当夜は、当直の番であった錢壯飛がひとり特務総部の「大本営」に留まっていた。

上記の二十五日の大本営の状況は錢壯飛神話成立の絶対的条件である。とすれば、物語が展開するにはこれらの条件が整っていなければなら

ない。だが、この条件には大きな疑問がある。あまりにも偶然が重なっていることだ。結論をいそいでいえば、錢壯飛が武漢行営から顧順章逮捕、自首したという電報を盗み取り、ただちに娘婿を使って上海の周恩来に伝え、党の危機を救ったという錢壯飛神話は、ある事実を隠蔽するために捏造された政治的な陰謀ではなかったか、のちに同じ性質の伍豪啓事事件が起こる、もつと具体的にいえば、顧順章事件の真相を隠すために創作された虚構の話であった。何故そういえるのか。いくつかの疑問点をあげて見よう。

まず南京に電報を打った武漢の状況から見よう。蔡孟堅と何成濬は四月二十五日にめいめいが蒋介石、陳立夫、徐恩曾に至急密電を打って、顧順章がすでに逮捕され叛変した、中共中央の機関を一網打尽にする計画があり、直接蒋介石総司令に報告したいといっていること伝えた。葉炳南の伝記では、このあとのくだりで、突然、主語が錢壯飛の方に替わり、南京の大本営の状況に話がる。これはさきに述べた錢壯飛神話によってストーリーが語られたからで、それによれば、一九三一年四月二十五日は、ちょうど土曜日であったので、錢壯飛一人だけが大本営に残って当直していた。とつぜん武漢国民党特務機関からの徐恩曾を経て国民党中央部秘書長陳立夫に宛てた六通の至急絶密電報を続けて受け取った。各電報にはすべて「徐恩曾親訊」の文字が書かれていたという。錢壯飛神話の重要な要素は、電報を受け取った時が二十五日、土曜日であったことであり、だから徐恩曾は留守をして錢壯飛が電報を受け取るような状況が生まれた。一つでもこの条件を欠けば錢壯飛の功績はなかったし、そもそも神話は成立しなかった。

ところで、いま一つ、党史が重視したのは二十四日の夕方に顧順章が逮捕されたという事実であった。筆者はかつて顧順章が何時逮捕されたかは事件真相の重要な要素であると述べたことがあるが、中共側の文献

は二十四日の夕方とし、葉炳南も二十四日とした。一方、国民党側の文章には、蔡孟堅は「某日」と述べ、「四月二十日前後」と注を付けた。張文は「四月のある日」とするだけである。党史が主張する「二十四日」説は、武漢から電報が届いた「二十五日」から逆算して逮捕は「二十四日」であったとした。そうすれば、「二十五日」は土曜日で、徐恩曾は留守であったので、宿直していた錢壯飛が絶密特急電報を盗み見することができたというすべての条件が整うのである。一方、国民党側は、顧順章は単なる一中共黨員に過ぎず、逮捕の情報は差し迫った問題とはならなかった。顧順章が国民党内部で話題になるのは、錢壯飛の存在を暴露して徐恩曾の面子をつぶしたことから深刻な派閥の対立を引き起こしたからであった。だから顧順章が何時逮捕されたかは問題にされなかったのである。

ところで、じつさいに錢壯飛はどこで至急密電を受け取ったのであるか。葉炳南は、まず絶密電報は武漢の国民党特務機関から送ってきたといっていた。ちょうど錢壯飛は大本営に当直していたというから、密電は徐恩曾の特務総部の大本営、すなわち正元実業社で受領したことになる。葉炳南がいう国民党特務機関とは正しくは武漢行営偵緝処である。武漢行営は国民党陸海空軍総司令部の武漢駐留部隊で何成濬將軍が主任であった。三十年八月、蔡孟堅は両湖調査員に任命され、武漢に派遣される。翌三十一年二月に蒋介石は何成濬と相談して行営の下に偵緝処を設け、湖南、湖北、江西三省の各都市の共産党組織を肅清する任務を担い蔡孟堅が主持した²⁰。とすれば、密電は偵緝処から送ったことになるが、後の話に出てくる六通の密電の内、最初の三通は何成濬將軍が発したというから、とうぜんこの電報は武漢行営の通信機から打ったことになる。しかも発信の宛先が蒋介石、陳立夫であるなら南京の陸海空軍総司令部の通信所であるはずである。後述するが、周谷ははっきりと密電は

総司令部に届いたと述べている。しかしながら、党史作家たちは何の疑いもなく錢壯飛神話を忠実に援用した。じじつ、党史の錢壯飛神話には大筋の枠組みを提起しているが、その論旨が成り立つ具体的な事実は何一つ示されなかった。だから党史作家たちは神話が語らなかつた細部を思いのままに潤色できたのである。

現代の党史作家、劉向上に次のような記述がある。すなわち、四月二十五日はおりよく土曜日であった。徐恩曾はいち早く上海に出かけ愛人と週末を過した。正元実業社では錢壯飛が徐恩曾に代わって中枢で守備していた。一日何事も無いように見えたが、夜九時過ぎ、通信機が続いて武漢から送ってきた数通の特急電報を受信し、その内の二通に書いていた徐恩曾親訳は錢壯飛の警戒心を引き起こした。武漢方面にいったいどんな大事が起きて、このように警戒するのか、また徐恩曾親訳でなければならぬのか？ 彼はすぐに部屋の前を閉めて電文を翻訳した。顧順章が漢口で逮捕され、また、すでに自首したという一節を翻訳したとき、大いに驚いた。ふたたびもし迅速に顧を南京に護送できれば、三日の内に上海の共党機関をことごとく肅清できる」というところを訳したとき、錢壯飛はすぐに事態の深刻さを悟った。……錢壯飛は当夜十一時にまだ寧滬特急列車があるのを知っていたので、この列車で上海に駆けつけることにした。部屋を出ると、錢壯飛はふと李克農の忠告を思い出した。ここを立ち去れば、完全に正体がばれてしまう、またすぐに敵の警戒を招き、党中央の危険を増すだけだと思った。この時、娘婿を思い出し、自分は留まって娘婿に上海に行かせて消息を知らせることにした。彼は娘の家の門を敲き、娘婿を促すと、簡単に要領よく状況を説明し、懇切に任務を与えたあと、車で娘婿の劉杞夫を南京駅に送った。錢壯飛が駅から正元実業社に帰ってくると、すでに子の刻の時分であった。彼は報務員に至急電を受け取ったらすぐに起こすよう命じ、部

屋に戻って休息した。翌日(二十六日)、錢壯飛はいつもの落ち着いた様子で職務についた。この日また武漢からの三通の至急密電を受け取った。……後始末を済ますと、錢壯飛は娘と上海から帰ってきたばかりの娘婿を呼び寄せ、彼ら自身が南京を離れるよういいつけ、また彼らに父の正体をごまかすよう告げた。

劉向上の文章は神話をもとにいかにも想像ゆたかに潤色したかがよく分かる。ただ彼が想像したところは彼の真理を求める真摯な姿勢によって生まれたものである。時によってそれは権威に対立することがある。劉向上の評論で興味を引くのは、顧順章が自首したことを知ると、その場からすぐに逃走しようとしたが、李克農の忠告を思い出して思いとどまり、代わりに娘婿を上海に行かせることにしたというくだりである。すぐに逃亡しようとしたという指摘は他の論考にも見え(本号二九頁)、錢壯飛がさほど党に忠誠心を持っていなかったことを示しており、このくだりは事実に近いのではないかと思われる。逃走を思いとどまらせた李克農の忠告は、かつて周恩来が錢壯飛を徐恩曾の元に送り込むときに重要な任務であると説得した言葉であった。前出の党史作家の康学軍は、錢壯飛が電報を解読したあと、正元実業社の中庭でどのように対処すべきか迷ったとき、脳裏にこの言葉が聞こえてきて、党に報告することを決心したと述べている。李克農の忠告としたのは劉向上がはじめてであるが、先ほどの周恩来が「龍潭三傑」に取り込もうとしたときには李克農もいたはずであるから、どの時にこの言葉があったのかが異なるだけである。しかし、このことから南京の情報本部での李克農の役割を想像することができる。南京の国民党情報本部で李克農は裏面で錢壯飛を巧みに操っていたのではなからうか。

劉向上はこのあと、二十六日、日曜日にも武漢から三通の電報が届いたといっている。次の王凱・劉佳の文章にも、劉杞夫が上海に向かった

あと、また至急電報が一通届き、すでに自分の身分が暴露していることを知ったと述べている。劉杞夫が上海に発つたのは、当時の上海方面行きの列車時刻表(表1)を見ると、十一時の最終の急行列車であるから、最後の至急電報が正元実業社に届いたのは二十六日になってからであろう。

王凱・劉佳にも武漢からの電報の到着経緯とそれを盗み見した錢壯飛の心境を書いた臨場感あふれる文章がある。それによれば、一九三二年四月二十四日、顧順章が武漢で逮捕され、すぐに叛変した。翌日の夜、顧順章は密かに一隻の貨物船で夜を徹して南京に押送された。数時間後、国民党中央組織部党務調査科の機密要員が表面に「絶密」と書いた電報を宿直の番に当たっていた錢壯飛の元に届けてきた。錢壯飛は発信地が武漢行営で、「徐恩曾親訊」と表記しているのを見、しかも当時はちょうど週末で、徐恩曾は上海で休日を過ごしていたので、錢壯飛も気にせず、その手ですぐに電報を傍らに置いた。しかしそのあと、

(表1)「京滬路列車時刻表」

南京・上海・杭州・閘口間(連)											
漢口行						南京行					
食12	食14	食22	食24	食28	食32	食7	食11	食17	食19	食27	食30
7:40	9:30	12:50	4:35	11:00	0	5:30	4:25	9:10	10:15	7:00	
9:44	11:12	3:01	6:18	12:49	69	1:42	3:00	7:31	8:57	5:24	
11:45	1:03	5:05	8:10	2:41	144	11:39	1:18	5:15	7:13	3:37	
2:58	2:13	6:15	9:10	3:43	183	10:30	12:17	4:07	6:05	2:33	
2:03	3:12	7:20	10:08	4:55	225	9:23	11:15	3:05	4:59	1:24	
4:25	5:05	9:25	11:55	7:00	312	7:05	9:05	12:30	2:45	11:00	
食8	食10	食2	食4	食6	食8	食1	食7	食3	食9	食11	
5:50	5:50	7:00	9:00	0	弗	弗	弗	2:05	10:40	9:26	
6:23	6:57	8:34	10:29	45	1:50	1:00	.55	...	1:04	8:13	
6:47	8:10	9:53	11:46	99	3:15	2:10	1:20	...	11:53	6:05	
8:15	10:15	12:30	1:55	190	5:80	3:85	2:15	...	9:50	6:40	
8:30	10:30	12:45	2:10	196	5:95	4:00	2:20	...	9:25	6:40	

上記ノ外南京發 9:40 上海北站行 上海北站發 9:30 南京行三、四等列車アリ
△目下連帶ノ取扱中止中
鉄道省編纂「汽車時間表」第六卷・第十号、昭和五年十一月発行による

一時間もたたないうちに機要員が続けて四通の武漢行営からの絶密電報を送ってきた。しかもすべてに「徐恩曾親訳」と表記されていた。いったいどんな事情がこのように緊迫させているのか？この四通の絶密電報にいったいどんな秘密が隠されているのだろうか？銭壯飛に疑心が起り、徐恩曾のところからこっそり複製した電報密碼本を持ち出して逐一破訳して、はじめて顧順章が叛変したことを知った。……いまもう四月二十五日の子の刻になろうとしている、情報は遅くとも二十六日の夕方までに上海の李克農に知らせなければならぬ。そうでないと、たとえ情報を得てもとも時間との轉移はないのだ。銭壯飛はその夜にまだ上海行きの汽車があるのを見つけ、急いで家に帰って娘婿の劉杞夫を起し、夜通しで上海に駆けて李克農に知らせることにした。劉杞夫を送りだすと、機要員がまた一通の至急密電を送ってきた。「絶対に欽座うんのひと以外の人に知らせてはいけない。そうでなければ、共党上海地下機関を一網打尽の計画はだめになる」銭壯飛はたちまち自分の置かれている境遇がはっきり分かった、顧順章は自分の身分を知っている、電報という徐恩曾以外の人とはまさに自分を指している。彼は急いで数通の密電を原状にもどし、徐恩曾の事務室の卓上に置いた。^②

王凱・劉佳は武漢からの至急電報は二十五日の夜に第一報が入り、一時間もたたないうちに国民党中央組織部党務調査科の機要員が続けて四通の極秘電報を送ってきたという。調査科の本部は南京の丁家橋にあり、銭壯飛が宿直している徐恩曾の特務総部——正元実業社は中央路三〇五号にあった。前出の劉向上は、正元実業社の受信機が数通の至急密電を受信し、銭壯飛は電報の表紙に警戒心を懐き、部屋のドアを閉めて電文を翻訳したと語っていた。^③

党史作家の劉向上、王凱・劉佳ともに銭壯飛は武漢からの密電を徐恩曾の特務総部、すなわち正元実業社で見たという。電報の表紙に異常を

気づき、密碼本コードブックで解読してはじめて顧順章の叛変を知った。銭壯飛はその上、この緊急の情報を上海の党中央に伝えるべく、娘婿の劉杞夫を最終の夜行特急列車で上海に奔らせ、李克農を通じて周恩来に伝えることにしたという。劉向上、王凱・劉佳らの論考はこの問題に対する多くの見解の一つに過ぎないが、しかし、どの論考も前述のように銭壯飛神話の筋書きの上に各の推量を重ねていた。だとすれば、銭壯飛神話そのものの信憑性は、劉向上、王凱・劉佳らが推量して書いたところを検討すれば自ずと明らかになる。

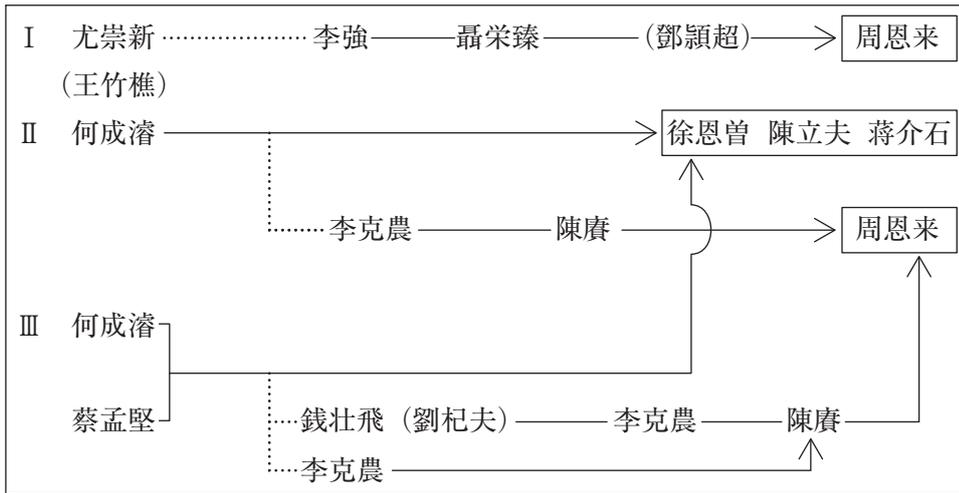
葉炳南は密電を正元実業社で受信したとだけ述べて、その時の様子を語らなかつたが、王凱・劉佳も顧順章が逮捕されて、数時間後に調査科の機要員が絶密と書いた一通の電報を宿直の銭壯飛の手に届けたとい、王凱・劉佳は、さらに一時間後につづけて四通の密電が届き、その夜、子の刻を過ぎた頃、また一通の至急密電が銭壯飛の手に届いたという。あるいはまた、銭壯飛が机に向かつて仕事をしていると、とつぜん機要員が入ってきて武漢綏靖公署から発した絶密電報を差し出した。ほどなくして、ぼんやりと電報を眺めていた銭壯飛はドアを敲く音を聞いて振り向くと、あの機要員がまた入ってきて、一通の同様の字の電報を差し出した。まだ何の手がかりもつかめないうち、機要員がまたドアを押して入ってきて、封面に字を書いた先ほどのとまったく同じの電報を二通届けてきた。一時間後、また二通の武漢からの電報が届いたという。^④

一見すると、なんの変哲もない叙述に思えるが、一つであるはずの事実がいくつもあるはずがない。いったい密電はどこに届いたのであろうか。正元実業社の受信機が受信した、また調査科の機要員が持ってきた、別の文章には、銭壯飛が静かに読書をしていると、すうーとドアが開いて通信員が入ってきて電報を机に置いていったという記述もあり、密電

はあきらかに徐恩曾の特務総部の正元実業社に届いた。だが、そもそも正元実業社に電報を受信する通信施設があったのであろうか。顧順章事件の詳細な「外伝」を書いた康学軍は、「前史」(12)に述べるように、銭壮飛がドアを閉めて書類の整理をしていると、耳をつんざくようなモーターバイクの音がして、通信員が黙って机の上に電報を置いていったと、外から運ばれてきたように語っている。六通の至急電報は二十五日の夕方ごろ南京方面に着いたとだけといって、正元実業社とはいわなかった。だとすれば、通信員はこの電報を南京陸海空軍総司令部の通信所から配達したのであろう。

じっさい、「前史」(13)に掲げておいたように、周谷は、周恩来が「龍潭三傑」を組織した後、李克農は南京陸海空軍総司令部弁公庁に潜入して訳電工作の任務に就き、中共特科は陳賡と李克農を派遣して經常の関係を保持し、南京

(表2) 顧順章逮捕・自首の情報が外部に伝わった3つの経路



(注) —は口伝、……は電報での伝達を指す

にもしも緊急の状況があれば李がただちに陳賡に報告して処理していた。ところが、武漢当局は顧順章の勧告を無視して、四月二十五日に蔣総司令、陳立夫部長、徐恩曾主任に至急密電を次々に打って、顧がすでに逮捕され自首したと報告した。電報が南京陸海空軍総司令部に届いたときに、弁公庁で勤務していた李克農がこの電報を翻訳した。李は電報を一時間ほどそのままにして、その後上部に提出したという。周谷はさらに興味深い指摘をする。李克農が電報をそのままにしておいたのは、この一時間の間に先を争って上海の中共中央に顧順章の逮捕と自首を知らせたのだという。このくだりの原文は、「在此一小时内搶先通知上海中共中央」である。「搶先」は鐘ヶ江信光「中国語辞典」によれば、①先を争う、②先手を打つ、③先鞭をつける、とある。この周谷の指摘が重要なのは、銭壮飛の動きより早く党中央に知らせたということであるが、周谷は李克農が誰と先を争って顧順章の情報を中央に知らせようとしたというのであろうか。周谷の指摘のとおりであるなら、本論が執拗に追究してきた課題である「誰が顧順章の叛変を知らせたか」の重要な回答が得られたことになる。はっきり言えば、顧順章の叛変をいち早く上海の中共中央——じつは顧順章暗殺実行グループの指揮者、周恩来に報告したのは李克農であった。

いま、顧順章逮捕の情報が周恩来の元に届いた順路をまとめて見ると、(表2)のような経路が指摘できる。

あとの問題は、国民党の心臓部に潜入した「龍潭三傑」——じつは李克農だけが周恩来と連絡があった。李克農はどのような行動をとっていたのか、彼の行動の中で銭壮飛はどのような役割を担っていたのかを明らかにすることである。しかし、「龍潭三傑」の中心人物はあくまで銭壮飛とする筋書きを書いた党史には故意に李克農の動向は隠蔽されていた。だが、銭壮飛を主題とする作家たちの叙述には相互に齟齬があり、

矛盾する表現が多く見られるが、かえってそこに党史の作為が見られるのであった。周谷はさきに指摘のあとに錢壯飛が密電を盗み読みしたことを述べている。すなわちこう話を続ける。四月二十五日の土曜日、正元実業社に当直していた錢壯飛は夜十時頃、武漢から発せられた六通の陳立夫、徐恩曾宛の特急絶密親訊電報を受け取った。異変を感じた錢壯飛は入手していた密碼複写本で解読した。電報はすべて武漢行営主任何成濬が出したもので、内容は驚くべきものだった。錢壯飛が驚いたのは第一報の顧順章が逮捕され、すでに自首した、三日以内に南京に護送できれば中共中央の機関を壊滅できるという情報で、第二報は、二十六日の朝に軍艦で顧を南京に護送するという内容の情報であった。

周谷は淡々と当夜の正元実業社での状況を語っているが、さきほどの李克農が総司令部で受領した武漢からの電報と錢壯飛が受け取った何成濬からの電報はどのような関連があるのだろうか。さきに錢壯飛が受領した電報は総司令部から配達されたものであるかと推測した。周谷は錢壯飛が受け取った電報はすべて武漢行営主任何成濬が発したものだといった。武漢行営の本部はもちろん南京陸海空軍総司令部であるから何成濬の電報は総司令部に届いたはずである。そうするとこの電報は李克農が見たあと、正元実業社に送られたのかも知れないが、周谷はそうは書いていない。「前史」(13)に取り上げた周谷の見解は中共党史の筋書きに囚われないかなり信頼できる論評に違いないが、客観性を強調するあまり前述のような国民党と共産党の説を併記するだけにとどまっている。

顧順章の逮捕と自首を誰がどこに伝えて、どのように処理しようとしたかに関してすでに検討を加えたように各論者に千差万別の表現があった。率直にいつてどの議論が真実なのかは判然としない。顧順章逮捕の功績を争って蔡孟堅、何成濬がめいめいに至急電報を打ったというが、

それぞれが上司に宛てたのであれば、宛て先も電文の内容もとうぜん異なるはずであるが、六通すべて何成濬が出したものといい、また六通のうち三通は蔡孟堅が出したものと違って、至急電報が錢壯飛の手に入つた順序も各説でそれぞれ異なる。何故このような錯綜があつたのかについては、一つしか解釈は存在しない。先に筆者は、現代の党史作家は基本的に党の公式の見解にもとづきながら各自がそれぞれの推量をはたらかせた。したがって各論説には異なる表現が見られ、矛盾する内容があつたが、これらは事実を脚色したという意味ではすべて真実であり、相互の叙述は関連していると見なせると述べておいた(本号一七頁)。各作家が描いた推量のところが真実で、これをもとに公式の伝記が作られたのではないか、というのが錢壯飛神話のほんとうの姿であろう。

もう少し検討を重ねてみよう。

錢壯飛が正元実業社に届いた電報を解読して驚愕したのは、「顧順章が逮捕され、すでに自首した、三日以内に南京に護送すれば中共中央の機関を壊滅できる」「明朝(二十六日)、軍艦で南京に護送する」と伝える第一報と第二報であつた(第一報だったともいう)。この電報が錢壯飛を英雄にした、というより英雄に仕立てる要素となつた。ところが、周谷によれば、顧順章が漢口で逮捕されたあと、錢壯飛は仔細を知ると、やっと慌てふためいて逃げ去つた(原文は、錢得悉後、始倉皇逃逸)。ただ、ここには電報から顧の逮捕を知つたとは述べていなかった。周谷は国民党中央調査科が設立されたとき、国民党の内外で活躍したのは二人の人物だつたという。「党の内には中共の錢壯飛がいて、ついに一九二八年、転々として国民党の対敵作戦の心臓に進入して機要長となつた。外には中央調査科のちに上海に派遣して対敵工作の責任者にした楊登瀛がおり、楊はまたしだいに自から変質して中共の上海の国民党調査機関に潜伏する首脳になつた。錢と楊の二人は、一つは南京で国民党の情報を窃

取して敵に資し、国民党の反共組織を破壊した。一つは上海で逮捕された中共人員と協力して危地を脱離し、中共の秘密機関を保全した。二人は手段を弄して密かに悪事を働き、国民党中央に一時、荊州^{まもり}を失わせた^⑧。だから、錢壯飛は顧順章の逮捕に仰天して遁走したのだ。周谷は「龍潭三傑」というなら、錢壯飛、楊登瀛、胡底を指すのであって李克農はそこの中に入っていない。李克農は別の指令系統で独自の行動を取っていたと断言する。まるで電報問題では錢壯飛は埒外にあったような口ぶりである。

たしかに李克農は神出鬼没であった。党史作家の楊新躍によれば、一九二九年十一月、李克農は中共滬中区の宣伝員となり、当地で偶然同郷の胡底に出会う。李克農は胡底の紹介で錢壯飛を知り、さらに錢の推薦で、十二月に徐恩曾が設立した無線電管理局に入り、全国の無線電報務員の登記と試験を管理する工作の責任者となる。同じ十二月、徐恩曾が国民党中央調査科主任になると、錢壯飛に調査科の組織拡大を要請し、共産党に対する軍事圍剿と地下組織の破壊の強化の協力を依頼した。錢壯飛はこの徐恩曾の計画を李克農に話し、党中央に報告するよう告げた。中共中央軍委書記の周恩來は、錢壯飛は継続して秘書に留まって徐恩曾に忠誠を尽くし、李克農は無線電管理局に入って編集に任じ、胡底は調査科に潜入することに同意し、また三人を特別小組^{チーム}に編制し、李克農を組長に任じ、周恩來自らが指導する。中共特二科科长陳賡の単線指導を受けることになった^⑨。

楊新躍は、錢壯飛が徐恩曾の「最も親密な戦友」と見なされると、徐が新設した秘密指揮機関と秘密無線電信所に入ってくる一般の機密文書、電報、各地から送ってきた情報、科内の日常事務はすべて錢壯飛が代わりに処理し、こうして国民党中央調査科のすべての機密はほとんどすべて錢壯飛の手中に掌握されることになったと述べる。錢壯飛がこう

した機密を手に入れることができたのは徐恩曾が肌身はなさず身に着けていた密碼本^{コードブック}を盗撮していたからだという逸話がある。高級官員専用の密碼本は蒋介石と陳立夫の命令で徐恩曾自身が保管し使用することになっていた。徐恩曾はいつも上海に夜遊びに行き、錢壯飛はこれを手に入れるためにこっそりと忠告した。「外出する時は密碼本を持っていかないうかがよろしいかと思えます。万が一失ったらたいへんなことになりますよ……」徐恩曾は忠告を聞き入れ、外出の時は密碼本を鍵のかかった弁公室の機密金庫に保管した。錢壯飛は機会を窺って金庫を開け、全部の密碼本を盗撮した。これ以後、国民党の多くの高級機密文書は絶えず訳出されて密かに李克農に送られ、中共中央に転送された^⑩。

密碼本を盗み撮りした話にはいろんな説があり、密碼本をうまく盗みだしたのは李克農と錢壯飛二人の知恵の賜物だったという。李克農はある妓楼に美人がいると外出するよう吹きかけ、密碼本を置いて行かせた。二人は金庫の裏側の銅版をこじ開け、当時最高の性能のドイツ製のカメラで一頁一頁撮影したとより具体的な描写の話がある。話の真偽は別として、この作者の意図は李克農と錢壯飛がいかに徐恩曾に信頼されていたかを述べるにあり、二人がつねに徐恩曾の身近にいたかを物語っていた^⑪。

錢壯飛が徐恩曾の情報本部から得た情報のほとんどは軍事情報であった。周恩來も国民党の軍事行動―圍剿作戰の情報が喉から手が出るほど欲しかった。だから早くから国民党の中枢部に間諜を送り込むことを決定していたのである。すでに述べておいたように、周恩來は例によって陳賡に人材を物色させ、陳賡は中共滬中区の宣伝員であった李克農を錢壯飛と接触させたのであって、党史作家がいうように錢壯飛が積極的に党に近づいたのではなかったのである。何度指摘しても指摘し足りないが、周恩來が李克農に大声で怒鳴った、あの「奴^{やつ}を連れてきて党の役

にたたせろ！」の「奴」は錢壯飛のことであり、「この崗位は簡單に手に入れられるものではない」といったのは周恩来が間諜になるよう説得した言葉であった。じつさいの周恩来の意図は徐恩曾に絶大の信頼がある錢壯飛を表に立て、党活動の経験が深い李克農に巧妙に操縦させることであった。李克農は名前を李沢田と変え、上海、南京の間を何度も行き来した。そのことを先の楊新躍は党史に次のように潤色して書いた。

三人の特別小組——のちに周恩来は龍潭三傑と称えた——が編制されたから、中共中央特科の指示にもとづいて名は調査科だがじつは中共の地下党が南京、天津などの地でいくつかの通訊社の名義で掩護にした半ば公開の情報機関を建設した。南京に長江通訊社、民智通訊社を設け、錢壯飛が両社の責任者となった。錢壯飛は胡底と日本留学から帰国したばかりの妻の弟、張家驪を天津日本租界に建設した長城通訊社に派遣し、胡底が社長になり、張家驪は記者になった。錢壯飛、李克農、胡底の三人は定期的に南京中央飯店の長江通訊社で情報を交換し、獲得した情報はすべて李克農が陳賡を通じて周恩来に報告した。

顧順章逮捕の情報が錢壯飛のもとに飛び込んできたのはこのような情況の時であった。当初、電報の表紙を見て軍事情報でないのに少しばかり油断したが、顧順章が逮捕されたのを知ってびっくりし、とつさに逃避しようとした。この夜の錢壯飛の心境は複雑で混乱していた。逃亡か、留まって党中央に危機を伝えるか、どちらにせよ時間は緊迫していた。党史では、錢壯飛は娘婿の劉杞夫（劉驥ともいう）を夜行列車で上海に奔らせ、李克農に報告させたことになっている。錢壯飛はまだ上海方面の列車があるのを調べ、すでに就寝していた劉杞夫を起こし、情報の重要性をてきぱきと伝え、一人で上海に向かったという。当時の列車時刻表によると（表1）、党史のいうとおりだと、南京発十一時、上海北駅着七時の急行列車であろう。もう明るくなっていた上海の町で小さな旅館に

泊まっていた李克農を見つけて、義父錢壯飛の言伝を知らせた。この劉杞夫の献身的な行動が中共中央の未曾有の危機を救ったことになっている。

しかし党史の記述とは別に、当事者の証言はずいぶん異なっていた。数少ない証言者の一人である錢壯飛の娘、錢椒と先妻の徐双英は、夫の劉杞夫は父といっしょに上海に行ったといい、上海の家に行った徐双英は、その日の晩、錢壯飛と劉杞夫がいっしょに帰ってきて党中央に報告したと回想した（本誌六二六号二二頁）。錢椒はのちに上海博物館で働き、『自伝』を遺している。そこに父と夫はいっしょに行ったと書いている。錢椒は一九七七年十一月十三日に病没した。錢壯飛の先妻徐双英は、中国の習慣では考えられないことに夫の姓を名のつて錢双英とするなど、錢家族の中では不可解な存在である。文章は遺していないが、劉杞夫が発する際に、義父から舅舅を探せ、探し出せなかったら岳母に会いに行けといわれていたから、李克農を探し出したのは徐双英の情報によるものであったろう。徐双英は李克農との連絡役をしていたという。筆者はもつと不謹慎なことを考えている。徐双英と李克農は単なる連絡員の関係だけでなく実質的な夫婦関係にあったのではないか、この関係は、錢壯飛は承知済みであった、というより錢壯飛がそのように凶つたのではないかと思われる。そう考えなければ李克農を舅舅と呼んだり、徐双英が錢の姓を名のつたり、また錢壯飛の子供らはみな父の本籍をいわずに母の張振華の本籍の桐城を称するのは不自然であろう。錢壯飛と李克農同一人物説もあながち軽視することはできない。あるいは李克農が相手と場所によって、時には錢壯飛、時には李克農を名のつて神出鬼没の秘密活動を行っていたのかも知れない。これこそ錢壯飛神話の実体なのであった。李克農のもう一つの顔に、弥勒仏の李とか老母鶏の李と呼ばれた人懐っこい好々爺の姿があった。顧順章が背骨を断ち切られた

癩皮狗と罵倒されたのと好対照である。しかし何故、李克農がそう呼ばれるのかは分からない。自分の正体を隠すための故意の演技だったかも知れない。⁹⁹

劉杞夫は父に託された情報をなんとか李克農に伝えることができた。このあとの李克農の行動を追跡しておこう。李克農はいち早く陳賡に伝えなければならなかったが、この日、二十六日は日曜日だったので、特科の規定で接触する日ではなかった。しかも李克農専任の秘密連絡員は江西余干県に出張していた。陳賡を探し出さなければ党中央に報告できない。思案のあげく、李克農は以前に工作した江蘇省委、滬中区委の關係を利用して陳賡を探すことにした。一日中、奔走して陳賡に会うことができた。迅速に周恩来のところに伝えるよう告げると、自分の妻を気にとめず、仏租界の錢壯飛の愛人張振華が住むところに飛んで行き、情況が変わった、前もってちゃんと準備をしておくようにと話した。当時、張振華は上海医院の産婦人科の医者で、七十過ぎの婆婆といっしよに住んでいた。家を出ると郵便局に行き、天津の胡底に電報を打った。¹⁰⁰

四月二十七日、上海の新しい秘密拠点で、周恩来は陳雲と対策を相談し、聶榮臻、陳賡、李克農、李強らの協力のもとに、ごく短時間内で数項目の緊急対応措置を実施した。この闘争の総指揮者としての周恩来は、きわめて冷静で周到な考えを持っていた。対応措置一つ一つ適切であることを聞くと、はじめて従容として拠点を引きはらった。

上記の一節は、前出の顧順章事件の内側まで掘り下げた康学軍の一文であるが、著者の意図とは別に違った想像を思い浮かべることができる。劉杞夫が上海に行つて、どのように李克農と会い、そのあと南京に帰つてきて、徐恩曾に逮捕された、などの記述があるが、それらはのちに作られた話に過ぎない。劉杞夫が父の代わりに党に危機を知らせにいったのであれば、これほど功績がある話はない。だが、劉杞夫夫婦、その母の徐双英、ま

たのちの錢壯飛暗殺説を含めて、これらの人はまったく跡形なく姿を隠してしまった。何故そうなったのかを想像すれば、顧順章粛清計画の中で党中央——周恩来らが想定した錢壯飛の役割が思惑とおりにならなくなったからである。それは終章で述べることにする顧順章事件で周恩来に利用された、もつと広義に言えば三十年代の周恩来の政治行動に利用され、犠牲になった人たちの最後の場面を見ればすべての真相があきらかになる。

4 その後の顧順章、錢壯飛——あとがきにかえて

国民党に投降したあと、顧順章は中統組織に入つて反共工作に奮闘し、向忠發、陳賡、羅登堅らの逮捕に貢献した。一方で中統内に特務工作訓練班を設立して、千人以上の特務員を輩出し、大きな勢力を築いた。中統の責任者徐恩曾は顧順章を牽制するために南京細柳巷四一号に住ませ、王思誠を監視役に派遣し、さらに徐恩曾の意図を汲んで、当時まだ中学生だった張永琴を後妻に娶わせた。しかし、顧順章が徐恩曾と対立する軍統の戴笠に近づくと、新共産党を結成する準備をしたという容疑で逮捕し、蘇州の江蘇反省院に拘禁した。一九三四年十二月、蒋介石の最終決断で処刑される。徐恩曾の部下に母が殺害されると、訴訟を起こして抗議した張永琴も顧順章の新党構想に同調した罪で逮捕され、蘇州の反省院に拘禁された。張永琴は獄中で幾人かの真正正銘の共産黨員と知り合った。その一人に周秀珠がいた。彼女は羅登賢の妻で、中共中央委員の大物であり、顧順章とも知己であった。彼女の夫はすでに犠牲になり、老いた母親と子供とも連絡を失い、一人ぼっちの孤独の身であった。張永琴はその彼女から大きな影響を受け、一九三六年の末、反省院を釈放されたあと莫逆の交を続けた。国共合作が成り、南京に八路軍

弁事処が設立されると、周秀珠はいつも弁事処に張永琴を連れて行って過し、葉劍英、博古、李克農、廖承志らの人と知り合った。この頃、周恩来が南京にくると、張永琴に釈放要求の提出を勧め、時に国共合作の国民党側の連絡員であった張冲と周秀珠が周恩来を紹介してくれた。やがて恩人の周秀珠は周恩来に随って延安に行った。このとき出獄したばかりの陳賡夫人もいっしょに行った。張永琴は汽車の駅に行つて見送つた。周秀珠は延安に行ったあとも、なお張永琴と手紙のやり取りをし、のちに張永琴が内地に難を避けたことで連絡を失つた。

一九九一年十二月、「公安史」作家の孫曙は上海市四川北路の張宅に顧順章の後妻張永琴を訪ねた。当時、顧の娘顧利群もその場にいた。孫曙はそれまで上海公安檔案から顧順章事件の当事者、尤崇新、黃佑南、楊慶山の人物、および顧と同時に逮捕された張崧生らの「解放後」の供述書や武漢党史、図書館から関係資料を調査し、中共鄂南特委書記、長江交通陳霖を訪ねて顧順章事件の再調査を行つていた。今回の訪問は国民党からも共産党からも完全に抹殺された顧順章の遺族から知られざる実像を聞くためであった。孫曙は訪問後も二十通以上の手紙を通じて顧順章一家の状況を聞き取り、写真の提供を受けた。張永琴は、一九九六年の春、文章は、私が死んでから発表して欲しい」と語つた。顧順章の問題がまだ現代の政治にも生きていることを物語つていた。

孫曙は、七年後の二〇〇三年に「私」という第一人称で書いた張永琴の手記を公表した。上の文章はその要約を書きとめたものであるが、ここで筆者がどうしても確認しておきたい逸話を採りあげておきたい。

徐恩曾の監視下にあった顧順章は新しい組織——新共産党を画策したという嫌疑で一九三四年十月に中途に逮捕され蘇州の江蘇反省院に拘留された（補注1）。張永琴も徐恩曾の提言で顧順章に面会するため蘇州に出かけるが、そのまま杭州反省院に囚われ、三六年九月まで監獄で過し

た。南京の家には幼い子どもと病弱の老母がいたので誰が彼女らの面倒を見るのか張永琴の心をひどく悩ませた。まして何故拘留されているのかさえ分からなかった。

彼女は反省院で多くの「正真正銘の共産黨員」と知り合う。彼らから教育、感染を受けることがあったが、同じ獄舎にいた周秀珠からは大きな感化を受けた。彼女は「人に対して熱情にあふれ、熱意がある人だった。拘留されたばかりの私をたえず慰め、よく笑い話をして私に聞かせた。」彼女は中共中央委員で、すでに犠牲になった羅德賢烈士の妻で、顧順章の知り合いであることを知つた。獄中のつきあいでは張永琴は彼女と莫逆の交を結んだ。反省院を出てから周秀珠の親切で八路軍弁事処におとずれ、著名な共産の幹部と知り合い、反省院の保釈書類の保証人になつてくれた張冲と周秀珠の紹介で周恩来に会うことができた。だが、周恩来は周秀珠と陳賡の妻を連れて延安に帰つた。張永琴は駅まで見送りに行つた。まさか周恩来が周秀珠、陳賡の妻が張永琴とこれ以上親しくなるのを恐れたわけではあるまい。

張永琴の話聞くだけでも周秀珠はすばらしい女性だと思える。とうてい恨みを懐いて張永琴に近づいたとは思えない。彼女の夫は顧順章の密告で中統に逮捕され、向忠發、惲代英とともに銃殺された共産党の歴史は書いている。事実はそうではなかったが、周秀珠は少なくとも顧順章の経歴は知つていたであろう。しかしながら周秀珠は何も知らないように張永琴の面倒を見た。南京では李克農を紹介し、張冲といっしょであったが、周恩来にも引き合わず。すべて周秀珠の誠意からでた行為だった。

李克農は顧順章事件で名を挙げたような人物であったが、周恩来の信頼を得て中共の保安部を牛耳り、人民解放軍の上将まで上りつめる幸運の人生を送つた。周恩来を紹介した張冲はソ連事情に通ずるかつての調

查科の総幹事で、顧順章が転向したとき、親切に接待した人だった。周恩来とも関係が深く、このときは国共合作の国民党側の連絡代表であった。^④

周秀珠が陳賡を知らないわけがなかった。張永琴の手記に、一九三三年の春の終わりから夏のはじめの頃、陳賡が出獄した足で、細柳巷の顧順章の家を訪ねてきて、二人は朝方までずっと話し込んでいたと回想している。^⑤ 陳賡が上海で逮捕されたのは、顧順章が彼の妻を追跡して陳賡の住いをつきとめたからであるという。潘漢年をモデルとした映画の中に二人が街中でいさかきをする場面がある。顧順章は陳賡に投降を勧めるが、陳賡は大声で罵倒したのだった。しかし後年、張永琴は李強から我われ三人はとも仲が好かったと聞かされた。じつさい陳賡と顧順章はともにソ連に留学して情報技術を学んだ仲であった。深夜の密談の内容は分からないが、少なくとも彼らは党史に描くような敵対する間柄でなかったことは間違いないようだ。

張永琴が周秀珠と張沖の紹介で周恩来と顔を合わせたとき、周恩来はどんな態度を取ったのであろうか。もともと顧順章の叛変事件のものをただせば、周恩来の顧順章追放計画に発端がある。顧順章が逮捕されたのを聞いて、周恩来は組織の秘密が暴露するのを恐れて、顧順章一家を殺害して穴に埋めた。憤激した顧順章は周恩来に懸賞金をかけて逮捕を要請した。周恩来は顧順章事件を総括する会議を開いて、顧順章を党の敵と断定し、抹殺を謀る。顧順章事件のものごとをただすと、周恩来の政治的保身にゆきつく。顧順章の憎悪の的は周恩来であり、周恩来の恐怖の的は顧順章であった。

周恩来は張永琴と顔を合わせてどんな感情を懐いたのであろうか。

張永琴の手記を読んでもっとも興味を懐いたのは周恩来の表情であった。その表情に顧順章事件の真相が垣間見えるはずである。

さて、龍潭三傑のその後はどうなったのであろうか。

上海に撤退した李克農、錢壯飛、胡底は特科の陳賡自らの配慮で安全な住いが提供され、厳重な保護を受けた。八月頃、彼らは前後して中央革命根拠地に移動し、錢壯飛は政治保衛局局長に任命され、李克農は同局の執行部長、胡底は同局の偵察部長になった。一九三三年、錢壯飛は中央革命軍事委員会第二局局長に転任し、胡底もまもなく鄂豫皖ソ区に転任した。錢壯飛、李克農、胡底の三人はみな長征に参加した。遵義会議後、錢壯飛は紅軍総政治部副秘書長に任命されたが、まだ就任する前に、貴州息峰地区で病氣のために置き去りにされ、夏樹雲と名前を変え、司令本部秘書と自称したが、当地の反動区長宋子楨と羅少安らに殺害された。胡底は長征途中で張國濤に殺害された。李克農は長征が陝北に到着したあと、中共中央連絡局局長に任じた。建國後、外交部副部長、解放軍副総參謀長を歴任し、上將の階級を授与された。一九六二年二月九日、北京で病死した。^⑥

上の一節は、党史作家が書いたその後の三人であった。真実をどこまで追求しているかまったく当てにならないが、三人に対する党の態度はもの見事に表明されている。簡単にいえば、天寿を全うした李克農をのぞいて錢壯飛、胡底の死は謎につつまれたままであった。錢壯飛、胡底は優遇されて江西の中央根拠地に行ったのであろうか。党中央―周恩来は顧順章の国民党転向に事情をあまりもよく知っている錢壯飛、胡底の処遇に困惑し、いずれ機会を見て処分することにはしていたのではないか。それが、胡底を張國濤が支配する鄂豫皖根拠地に追いやり、錢壯飛を土匪に殺害させるに至らせた。

錢壯飛はどのような状況で死に至ったのか。楊耀健が整理した錢壯飛はなにゆえに大部隊から離脱し、どのように殺害されたのかの諸説を記しておこう。

①一九三五年三月二十九日、軍委は沙土に到達した。この時、錢壯飛

は蒋介石が飛行機で烏江の渡口を爆撃しようとするのを知ると、中央軍委が安全に渡江するために敵の封鎖線の江辺に人を遣り敵情を偵察させ、渡江路線を了解したが、不幸に土匪に襲撃されて、勇ましく犠牲になった。『貴州城鎮漫歩』

②一九三五年三月二十九日、錢壯飛は中央軍委が安全に渡江できるために、単独で出発して路線を選択したが、不幸に沙土後の烏江辺を隔てた大森林で、地主の武装に待ち伏せされて英雄的に犠牲になった。周恩来は消息を聞いたあと、一部隊をくりだして返り、二日の間搜索したが、効果を収められなかった。『中共金沙県党史・烈士伝專輯』

③錢壯飛は紅軍の長征が烏江を南渡したとき敵の爆撃に遭って犠牲になった。『辞海』

④一九三五年四月二日、貴州省息烽県流長郷客戸寨で反動民団の殺害に遭った。『中国共産党歴史大辞典・総論・人物』

これらの記録の中で、特に注意を引くのは、周恩来がすぐに行動を起こして搜索を開始したことである。楊耀健は、かつて白区でいっしょに戦った同志はみんな錢壯飛を悼んだ。とりわけ周恩来は国民党支配区から延安にきた人に会うたびに、必ず錢壯飛の殉難の実情と家族の情況を聞き、またたびたび地下党組織の調査を手はずしたと、錢壯飛をずっと気に懸け、見守ってきたように述べる。しかし、楊耀健がいうとおりにはすなおに読めない。⁴⁵⁾

錢壯飛の家族が彼の死を知らされるのはずっと後のことだった。党史作家は周恩来夫婦の「革命烈士」の遺族に対する援助の様子をそれぞれ次のように書いた。

一九三七年七月に蘆溝橋事変、八月に上海抗日戦争が勃発すると、上海で生活していた人たちはみな争って内地に移転した。この時、錢壯飛の子の錢江と次女の錢蓁蓁(黎錦輝の養女になって黎莉莉と名前を変えた)は

数人の進歩的映画界の知名人とともに幾多の困難をのり越えてついに当時の抗日の政治、文化の中心地の武漢にやってきた。武漢では黎莉莉らは中国映画製作所に参加し、錢江は武昌芸専で美術を学んだ。しかし、まもなく政治情勢は厳しくなり、彼らはまた輾転として山間の町、重慶にやってきて、みんな中国映画製作所で働いた。

ある日、中国映画製作所の工作員がこっそり錢江に言伝を伝えにきて、みんな李克農に会いに行くようにいった。その時、錢江ははつきりとあの李伯伯(わしえ)は李沢田と呼んで、李克農といわなかったことを思い出した。当時はちょうど皖南事変(一九四一年)の前夜で、重慶は反共の空気で緊張していた。だから錢江はあえて軽率に会いに行かなかった。数日たつて陽翰笙(原名は歐陽本義)が人に手紙を持って寄こした。手紙にはこうあった。周恩来が錢江と弟の錢一平を延安に行かせたい。この消息を得て、彼らはひじょうに喜んだ。まもなく周恩来の手配で、彼らは国民党の何重もの妨害を突破して、無事にずっとあこがれていた革命の聖地延安に到達した。

延安に着いたあと、周恩来副主席の配慮で錢江は魯芸(魯迅芸術学院)美術系で美術を学び、錢一平は自然科学学院に学んだ。周副主席は革命の後継ぎに対して至りつくせりの配慮をした。彼は重慶から延安にゆくたびに、必ず錢壯飛の子女たちを彼の家に招き、生活を心配してあれこれと尋ね、彼らの学習、生活や政治的な進歩に関心を示した。延安では、錢壯飛の子女は党の心を込めた養育を受け、彼らに政治上、文化上で絶えず向上を求め、何も分からない子供から共産主義の戦士へ成長させた。⁴⁶⁾

しかし、錢江らの映画工作者が重慶にいったのは党組織の指示であったという記録があり、それによれば、一九四六年春、党組織は錢江らを重慶に派遣し、蔣管区(蒋介石管轄区)で進歩的映画工作を行なうことを計画した。錢江ら一行が重慶につくと、弁事処の錢之光が錢江に言伝を

持ってきて、周副主席と鄧穎超が彼ら家族を曾家岩に食事に招くということだった。周副主席が彼ら家族と接見した時に、錢壯飛の夫人の張振華にこう語った。「錢壯飛同志は長征中に烏江を渡るとき光榮にも犠牲になった。彼の犠牲は党のため、革命のためであり、党と人民は決して彼を忘れないであろう」張振華はすでに犠牲になったことを聞いて、ひどく悲しんで泣きくずれた。周副主席はまた彼女を慰めた。^⑦

錢壯飛の家族が重慶に来たのは、一九三七年の国共合作が成立したあとのことで、錢壯飛の妻張振華は錢壯飛の母親と二人の子供、錢江、錢一平を携えて遷ってきた。李克農は周恩來の指示を受けて家族を訪ねた。八路軍重慶弁事処で家族と会見すると、周恩來は流浪七年で、やつれた顔の二人の子供を抱きかかえ、やさしく声をかけてこういった。「これからは周伯父さんと呼びなさい！」その後、一九四〇年に二人の子供を延安の陝北公学に送って勉強させた。延安では、周恩來、鄧穎超はいつも二人の子供に、「すぐに私たちの子供になりなさい！」と話しかけた。

一九三九年の初め、錢壯飛の妻張振華は錢の母と実子の錢江、錢一平を連れて重慶に流れてきた。李克農は周恩來の指示を受けて、彼ら家族を探し出し、すぐに彼らを第十八集團軍駐渝弁事処に出迎えた。鄧穎超は深い情愛の気持ちを表して張振華の手を握っていった。「壯飛同志は党のために大功を立て、我われに大災難を免れさせた」周恩來はこういった。「もしも彼の警戒の報告がなかったら、私や多くの中央の指導者、多くの上海で工作する同志はとくにこの世にいなかったであろう」さらに周恩來は、二人の長年流浪して柴のように痩せ細った子供を懐に抱いて、やさしく彼らに語りかけた。「これから、周伯伯と呼びなさい」

一九四〇年、日本軍の飛行機がしきりに重慶を爆撃し、周恩來は特定の責任者に二人の子供を延安に送らせ、彼らを陝北公学で正規の教育を受けさせた。また鄧穎超と毎回延安に帰り、いつも子供たちの機嫌をとつ

て土産を持ち帰り、何度も「あなたたちは私たちの子供になりなさい」と話した。張振華と錢の母は重慶の郊外の一般の人家を按配され、生活費は弁事処から定期的に支給された。

一九四六年、中共代表団が南京に移転する前、周恩來は再度二人の子供を重慶に連れてきて、張振華と錢の母と一家団欒した。周恩來は張振華にこういった。「錢壯飛同志は犠牲になったけれど、しかし党と人民は永遠に彼を忘れないだろう」^⑧

一九四六年に周恩來、鄧穎超はふたたび重慶にかえって工作し、また張振華と家族を曾家岩50号に招待した。周恩來は深い情愛を込めて錢夫人に話した。「錢壯飛同志はとくに光榮に犠牲になった。党と人民はきっと彼を忘れないだろう！」「伝奇的な英雄——錢壯飛は、永遠に党心、軍心、民心の中に生きているだろう！」

これらの話は、周恩來夫婦の錢壯飛の遺族への深い情愛を党の美談として語られたものだった。この美談を素材にして党史作家たちが周恩來の思惑を推察して錢壯飛神話に仕立てた。それが本節（本誌六二六号）の冒頭に掲げておいた周文琪と譚宗毅の錢壯飛の評論であり、体系的に公式の伝記に書き上げた葉炳南の「正伝」であった。

ところで、周恩來夫婦はなぜこれほどまでに錢壯飛の遺族に援助の手を差し延べたのであろうか。周恩來の真意は何であったのであろうか。この答えこそ本節の課題を解明する核心となる。上記のような錢壯飛の神話がなぜ作られたのかという意図が明らかになるのである。

錢壯飛の遺族が周恩來に出会うのは国共合作が成立したあとの重慶においてであった。それは決して偶然ではなかった。錢壯飛が瑞金の中央ソ区に逃避したあと、上海に残された家族がどのような境遇にあったのかは明らかでない。上記の党史作家の記述では、三七年の八月、錢江と姉の錢素素（黎莉莉）は上海を離れ、映画活動をつづけながら武漢から重

慶に行き着く。いっぽう、三九年の初め、張振華は錢壯飛の母、錢江、錢一平を連れて重慶に流れてきたという。しかしここには、錢壯飛の最初の妻徐双英、徐の娘錢椒、その夫劉杞夫はいなかった。このことは周恩来の意図と深いかかりがある。彼らは父の徐恩曾の特務総部でのほんとうの役割を知っていたので、上海の周恩来は彼らとの連絡を切つて地方に追いやっていた。周恩来はあとに残る張振華と錢江の行動が気がかりであった。張振華や錢江が父の行方を探したり、父の不審な死を知つてあちこちに問い合わせることを恐れた。彼らにその気がなくともどこから真相の情報を耳にするかも知れない。周恩来は彼らの動向を李克農に監視させた。延安にやってきた人から張振華らの噂を聞きだそうとした。

すでにわが家の境遇を理解する年頃になっていた錢江は顧順章事件での父と李克農の複雑な因縁を感じていた。父は党に利用されていたに違いない、少なくとも李克農は周恩来の指示を受けて父を操っていたと思つた。錢江らが重慶の映画製作所で働いていたとき、製作所の工作員がみんな李克農に会いに行くよう伝えた。李克農に何らかの便宜を図つてもらうためである。しかし錢江は、当時、李沢田と名のついていたのを思い出し、あえて会いに行こうとはしなかった。李沢田は李克農ではない訳を錢江は知っていたのである。

李克農は周恩来の「奴をつれて来て、党の役に立たせろ」という指示で、錢壯飛を特科の間諜に引き入れた。しかも李克農は巧妙に錢壯飛の名を騙つて党に利益を供した。そのため錢壯飛の家族は離散し、不幸な境遇に陥ることになった。錢江はこのような事情をうすうす感じていたのであろう。

周恩来は李克農に張振華親子を探し出させ、党の恩人の遺族に会う態度で家族に接した。周恩来と鄧穎超は二人の子供にちゃんとした教育を

受けさせ、母の張振華には住宅と生活費を提供した。一九四六年、周恩来は初めて錢壯飛が長征中、土匪に襲われて死亡したことを張振華に話した。

注

- ① 葉炳南「錢壯飛」『中共党史人物伝』三十四卷 一九八七年
- ②、③、④、⑤ 中共漢口活動委員会による蒋介石暗殺計画については、蔡孟堅「兩個可能改写中国近代歷史的故事——兼述顧順章自首、匪穴瓦解及我党清除奸細之經過」《伝記文学》第三十七卷第五期、及び同著「共党把我搬上銀幕自顕惡跡——拍「金陵之夜」電影、演「壯別天涯」話劇」《伝記文学》第五十二卷第五期に記述がある。
- ⑥ フレデリック・ウエイクマン, Jr. "Policing Shang hai 1927-1937" University of California Press, 1995 漢訳『上海警察 1927—1937』上海古籍出版社 二〇〇四年 一五四—一五五頁 以下、フレデリック・ウエイクマン『上海警察』と表記する。
- ⑦ 張国棟「中統從顧案血腥發家」『中統特工秘録』（江蘇文史資料第四十五輯）江蘇文史資料編輯部出版發行一九九一年五三頁 張国棟（張文）の国民党調査科（中統）に関する回想にはいくつかの版本がある。本論で最初に引用した「周恩来の誤算（二）」（本誌六一九号）注⑫で紹介しておいた。
- ⑧ 孫曙「顧順章後妻張永琴訪談録」《文史精華》二〇〇三年第五期
- ⑨ 王光遠『浦江魂——白色恐怖下的周恩来』中央文献出版社 一九九九年 一九四—一九五頁
- ⑩ 当時、顧順章の逮捕に係わつたという黄凱は、顧が宿泊していた陶陶旅館にいたのは小張というものであったという。交際女郎よるのおんなについては注⑥のウエイクマンを見よ。
- ⑪ 穆欣『隱蔽戰線總帥周恩来』中国青年出版社 二〇〇一年 三五二頁
- ⑫ 黄凱「我的特工生涯和所見所聞」『中統特工秘録』（江蘇文史資料第四十五輯）江蘇文史資料編輯部出版發行四—五頁
- ⑬ 康学軍「驚動国共両党高層領導的顧順章叛変案」《文史精華》五十四

一九九六年

- ⑭ 周谷「六十年前潜伏在国民党心臟中的共諜」《伝記文学》第五十六卷第一期
- ⑮ ②と同じ、尤崇新については拙稿「周恩来の誤算（二）」本誌六一九号参照

⑯ 『聶榮臻回憶録』上 战士出版社 一九八三年 一二六頁

⑰ ⑫と同じ、五頁

⑱、⑲ 注②の蔡孟堅「兩個可能改写中国近代歷史的故事」と同じ

⑲ ⑦と同じ、五三頁

⑳ ①と同じ

㉑ ⑭と同じ

㉒、㉓ 劉向上「李克農、錢壯飛、胡底、虎穴三傑」的伝奇人生」《四海鈞

沉》二〇〇九年第六期

㉔ ⑬と同じ

㉕、㉖、㉗ 王凱・劉佳「紅色間諜」錢壯飛」《黨員幹部之友》二〇〇六年第六期

㉘ ㉓と同じ

㉙ ㉖と同じ

㉚ ㉗と同じ

㉛、㉜、㉝ 楊耀健「錢壯飛之死」《紅岩春秋》一九九七年第四期。また、

陳棻徳は「伝奇式的英雄—錢壯飛」《貴州文史天地》一九九七年一期）に

こう述べる。徐恩曾は錢壯飛を信任していたが、しかし彼が国民党高級官

員と連絡する特殊な密碼本があり、彼は必ず身に付けて、「重中の重」と

して、絶対にとんな人にも見せなかつた。この特殊な密碼本を手に入れ

て、はじめて国民党最高統治集團の最も重要な核心機密を扱うことができ

た。このため、李克農、錢壯飛は何度も相談したあと、徐恩曾の好色喜

標の特徴を利用して、念入りに次のような妙策を考えた。あるとき、徐恩曾

が女買いに行こうとしたとき、出かける前に、錢壯飛は忠告していった。

「先生はこれを持ってどうされるつもりですか？」すぐに徐に特

密本を

保険櫃にいれ、自ら鍵をかけて秘密が漏洩しないようにしてはどうですか

と建議した。徐はそれを聞くと、なるほどそうだと思います、そのとおりにし

た。徐が出かけたあと、錢壯飛は早くに手に入れていた鍵で金庫を開け、写真機ですべての密碼を撮り、そのあと鍵を戻しておいた。はたして写し撮った密碼本は、そのあとすぐに起こした作用は格別であった。倪良端も「虎穴英豪錢壯飛」《党史縱覽》二〇〇三年第五期）でこの場に李と錢の二人いたとする。

⑳ 山丁「情報奇才錢壯飛」《文史天地》一九九九年第二期

㉑、㉒ ⑳と同じ

㉓ ㉑と同じ、一九六頁

㉔ ㉓と同じ、及び羅明「錢壯飛智救党中央」《軍事博覽報》二〇〇三年九月三日

㉕ 披見するところでは、李克農の体系的な伝記は徐林祥・朱玉の『李克農

伝』（安徽人民出版社、二〇〇三年）が量的にもっとも詳細であろう。し

かしこの著の価値は、「本書は国家安全全部弁公庁の審核批准を経ている」と

いうところに端的に表明されている。李克農が出世する出発点になった

顧順章事件、とりわけ「龍潭三傑」の真相については、この書にはほとんど

触れていない。

㉖ ㉓と同じ、及び苗体君・竇春芳「李克農兩救周恩来」《覚悟》二〇一〇年

第一期、張榮及「李克農冒死救中央」《文史春秋》五八 二〇〇三年第一〇

期を参照

㉗ ㉘と同じ

㉘ 周恩来と張冲の關係については、拙稿「ある追悼文——西安事變前後の

周恩来、張冲そして潘漢年」《立命館東洋史学》第三〇号、三二号、三三

号 二〇〇七年、二〇〇九年、二〇一〇年を参照

㉙ ㉚と同じ

㉚ ㉛と同じ、三〇九頁

㉛ 陳棻徳によれば、一九八六年一月十日、中共金沙県党史弁、沙土区委党

史徵集小組が合同で調査組を組織し、「深く大衆に入り、何回も調査し、

実際に確めた後、「総参三部に次のように報告したという。「……一九三五

年三月二十九日の午後、紅一軍団三團一營の一個小隊が先遣の渡江作戦を

担当し、火力の掩護で座上の竹小隊が真っ先に大塘渡口から南岸に前進し

て劃したが、山頂の敵は死にもの狂いで竹小隊を射撃した。竹小隊の戦士

が

たちは渡河しなかっただけでなく、逆に急流に流されて北岸に戻されてきた。そこで部隊は野戦に備えた。夜の十時、勇士たちは暴風雨の掩護で、ついに対岸に到達することに勝利した。渡江したあと戦士たちは、黑夜の中で風雨の呼嘯と江水の波濤の音によって火把岩、観音岩の大部分の守備兵を消滅した。その後、先遣部隊は渡江し、また付近の敗残兵を消滅し、南への山上の通行路を開き、渡江を制圧した。四月一日、師団の主力部隊は全軍が江を渡った。これより前、三月二十九日、中央軍委はすでに沙土鎮に進駐し、指揮部隊は迅速に南に移動していた。三十日、後山に進んで宿営した。三十一日、梯子岩、大塘渡口をへて浮橋を通って息烽流長で宿営した。四月三日、毛沢東主席、周恩来副主席、朱（徳）総司令ら中央首長はすでに息烽の馬場に到着した。紅軍の各部隊がすでに烏江の南渡に勝利し、勝利に乗じて貴陽方面に疾走中に、この時、さらに一人の紅軍の同志が主力の紅軍の渡河路線に沿って、ただ一人で烏江北岸方面に向かって走っていった。この人は烏江北岸の梯子岩からおよそ二華里（千メートル）離れた彭桂容の家を走っていったとき、彭家で物を買って食べ、この紅軍は身に青色の軍装を着け、黄色の布包と小皮包を背負い、手に一包みの物を持ち、身に拳銃（外面に見えていた）を帯びていた。彼は背が高く、面長で、外省のなまりがあった。彭桂容の家は彼の話を聞いても分からず、くわえてこの時、紅軍はすでに江を渡っていたので、ただ彼だけがここに来た。彼は紅軍だろうか、彭は疑惧を感じ、そこで彭は赤ん坊を背負って外に走って出た。飢餓と疲労がこの紅軍をすっかり降服させ、彼は彭を追いかけ、語りかけながら上着のポケットのかねを探りした。彼は陳慶嫂の家まで追いかけ、また陳に卵を買って食べようとしたが、陳も彼の話を聞いても分からなかったもので、また走って逃げた。この紅軍は飢えを満たす食べ物を買えず、日も暮れてきたので、毅然として陳の家を離れて川辺の方に身を転じて歩いていった。一華里も行かないうちに黎叢山の家の門口を通り過ぎていた。この紅軍ははじめて来たばかりだったので、彼は黎叢山こそ当地の悪徳地主の劉家のグルで、また悪いことなら何でもする土匪であることを知らなかった。この紅軍は黎の家に入って行き、黎に道案内を頼んだ。黎はこの紅軍が一人で、拳銃を持っており、また包裹

を持っていたのを見て、ついに悪意が生まれ、黎は「熱心に」この紅軍のために道案内をし、歩きながらもくろくろみ考えた。梯子岩付近の堰田岩（いまの後山郷岩口隊）にきたときに、江面にすでに江を渡る浮橋がないのを見て、黎は心で銃を奪う時機がきたと思いい、堰田岩の頂上に立って、この紅軍に江を渡る路線を指差すふりをした。この一瞬の間に、黎はこの紅軍が岩の上に立って神経を集中して路徑を眺めていた時に、黎は両手で勢いよくこの紅軍を岩に推し倒した。この岩はまっすぐ突き立って険しく、高さは三十メートルほどであった。この紅軍は岩のなかほどまで落下して雑木に引掛かった。黎はまた岩の上に立ってごろ石でこの紅軍を岩底に突き落とした。そのあと、黎はまた岩を落とし、続けて大きな石でこの紅軍を押し殺した。また紅軍の拳銃とすべての衣類を奪った。黎は山から家に帰ったあと、彼の甥の黎子修は彼が紅軍から手に入れた綾織りの衣類を見た。グレーのズボン一本、セーター二着、拳銃一丁。のちに黎叢山は拳銃を沙土鎮区員の何中培と二石の穀物と馬一頭と交換した。黎叢山がこの紅軍を謀殺した数日後、当地の一般大衆が大きな危険を冒してこの紅軍の遺体をその地に埋葬した。一九七七年八月、烏江発電所のダムの水位が上昇し、この場所が埋没しそうになり、この紅軍の遺骨はまた大衆に掘り出され後山郷張家堰口に移され、また石碑が建てられ、紅軍烈士の墓が刻まれた」この紅軍とは誰か。聯合調査組は多方面の論証へたあと、これこそ紅軍総政治部副秘書長の錢壯飛だとした。

④6 秦言「錢壯飛和他的子女們」《国家安全通訊》一九九九年第二期

④7、④8、④9 注③の楊輝健「錢壯飛之死」《紅岩春秋》一九九七年第四期、及び陳榮徳「伝奇式的英雄——錢壯飛」《貴州文史天地》一九九七年第一期、王凱、劉佳「紅色間諜」錢壯飛」《黨員幹部之友》二〇〇六年第六期

（補注1）顧順章の死については、孟真「特務大師」顧順章、陳蔚如「顧順章之死」、林金生「顧順章被殺真相」を参照、いずれも『中統特工秘録』（江蘇文史資料第四十五輯）江蘇文史資料編輯部 一九九一年所収。

（完）
（本学文学部特別任用教授）